コレクション頒布会体験記

鬼石 私の本もの美術館　秋山 功（群馬県高崎市）

コレクターのだれもが、歳を重ねるごとに蒐集した作品の行く末が心配になることだろう。しかし、多くのコレクターが自宅の部屋を占領する絵画作品に辟易され、家族の関心が薄い場合が多い。やっかいなお荷物とさえみられているのが実状であろう。

私自身は、昨年癌が発見され、その処分が切実なものとなってきた。そんな時、地元の画廊のオーナーから「少しコレクションを手放さないか」との声がかかった。このコロナ禍の中、展覧会も企画できず、画廊が空いているという。渡りに舟で頒布会の開催を決めた。最初は、オークションということだったが、後始末が大変ということで、頒布会として代金と引き換えにその場で引き取って貰うことにした。オークション形式でもほとんどが下値で、手間だけがかかるということであった。

作品を選び少しずつ画廊へ運んだ。はじめはオークションで落とした複数の自分の好みでない作品を持って行ったが、さすがに、これでは売れないから「目玉となる作品も少しは出してよ」と言われ用意した。160 点あまりを出品し、画廊や仲間のコレクターが賛同して 200 点あまりになり、画廊の壁面いっぱいに飾られた。

頒布会に際して、案内状を出す人は画廊の顧客と私自身の関係では親戚や友人、昔の同僚に絞った。教え子に出せば来てくれて義理で買う者もいるから避けた。教頭や校長時代の職員も同じ理由で出さなかった。それでも予想以上の来客で意外に美術が好きな人が多いことがわかった。特に地元の新聞に取り上げて貰ったことが大きかった。何と私の出品作品だけで半数が裁けたのだ。儲けは考えず、コレクションの楽しさを知って貰うことを第一に考え、平均２万円程度に値段を設定したのもよかった。これなら小遣い程度でちょっと無理すれば買える。奥村土牛や小倉遊亀等文化勲章作家でも版画なら２万円、中央のオークションより安かったと思う。気に入った作品は、親戚や友人に持って貰いたかったが、人の好みはまちまちである。無理強いはせず、好きな作品を選んで貰った。流石に目の利くコレクターがいて、独りで優品を 17 点も買っていった。まだ頒布会が終わっていないのに「今度、いつやるのか」と問うお客もいた。

お客には喜んで貰い、画廊のオーナーにも喜んで貰えた。私自身もレベルアップのための新たな購入資金ができ、みんなが喜ぶ頒布会となった。

大川館長とのお約束

新井 博（埼玉県川越市）

大川栄二著『美の経済学』を何回も読み返し、勝手に師と決めていた。

1997 年 7 月、念願の桐生・大川美術館に絵画好きの仲間と訪ねたのがお昼少し前、憧れの大川館長が展示室におられた。恐る恐る声をかけてみると、気軽に館長室に案内された。

緊張している私達に機関銃のように大川節がさく裂し、名物のソースカツ丼にありつけたのは午後 4 時を過ぎていた。

１週間後連絡があり個人メセナへのお誘い、仲間 30 名が入会したところ川越支部に認定するとおっしゃり、私達のコレクション展にも桐生から電車を乗り継いで駆けつけてくださった。

お帰りは車でお送りすることになったが運転手役が桐生への帰路、館長との時間を多く共有したいため高速道は制限速度厳守、一般道では黄色信号になる前に停車し、貴重な体験をしたと話していた。

館長のいう西洋長屋なるご自宅を訪問した際、「俺の借景は日本一！　赤城の山と渡良瀬川をひとり占めだ」と、いたずらっぽい笑顔が忘れられない。

2006 年には小生のコレクション展も開催していただいた。

晩年になり「俺のあとをあんたやってくれんか」のビックリ発言。「俺の絵の見方とあんたの見方は同じだ」「お世辞を言わないでください」「あんたは俺がお世辞を言わなければいけない偉い奴か」、そんなやり取りが数年続きましたが、そんな大役を引き受けることはできませんでした。

大川館長が館の行く末を案じていたことを、没後理事であった市長さんや他の理事の皆さんに「大川美術館は桐生の宝です。全国区です。川越から国立近美に行くほうが近いが、桐生に足が向いてしまいます」と言い続けた。

ボランティア館長として頑張ってきた大川さんを永年公私にわたり支えてこられた当時の遠矢理事長と協力して、後任の理事長を市長さんにお願いすることで公立美術館への道筋をつけることができ、大川館長とのお約束は果たせたかなと安堵しています。

大川館長との出逢いは小生の人生において大きな財産となりました。感謝

大川館長（右）との２ショット

「あーと・わの会」に入会して

ギャラリー枝香庵　荒井よし枝（東京都中央区）

私が「あーと･わの会」に入会した理由は、絵のことを知りたかったため、コレクターや、作家、画廊のことを知りたかったからです。

2006 年 9 月、特に絵に興味があったわけではない私が、考えてもみなかった画廊を開くことになりました。画廊を始めようとする人は絵が好きだったり、コレクターであったりするのでしょうが、私の場合は、全く違いました。画廊に入ったことも、絵を買ったこともほとんどないのに、ある方に勧められるまま、「絵を描く作家さんとお話ができる！」という本当に単純で軽い気持ちで始めたのです。

作家も知らず、運営の仕方もわからず、どのような絵がいい絵なのか、絵を売るということはどういうことなのか、画廊の役目はなんなのか…。

展覧会をしていくうちに、分からないことだらけで、これは、いろいろ、勉強しなければ、と思っているところへ、絵の好きな人が集まって意見交換している「あーと･わの会」があることを知り、入会することにしたのです。お陰様で、たくさんの個性的（？）な方々と知り合い、いろいろなことを学ばせていただきました。

梅野 隆さんとも、「あーと・わの会」に入会しなければ、出会えていませんでした。

晩年、梅野記念絵画館に行った際、閉館時間が過ぎているのに、「とにかく画廊や骨董市をできるだけ見て、自分がいいと思う絵を探してみること」と、口角泡をとばし、熱心にお話ししてくださったことが強く印象に残っています。

また､会員の方の個展やコレクション展､オークションなどを画廊でさせていただき､「ギャラリー枝香庵」のことを知ってもらういい機会となりました。

「あーと・わの会」からは、絵を観るだけでなく、その作品を描いた作家の心情や時代背景などを調べて、より深く作品を鑑賞する楽しさも教えていただきました。これからも自分が好きなアートを手元に置いて、豊かな気持ちで過ごしたいと思っています。

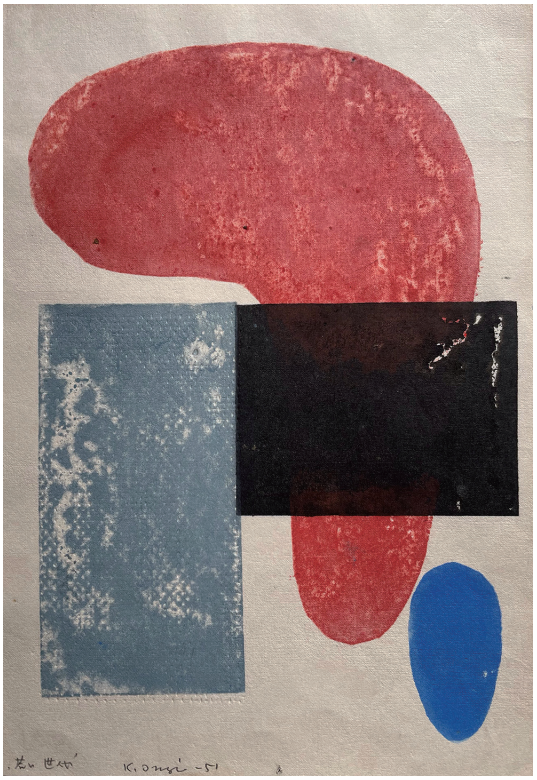
恩地孝四郎の新しい美を求め続けた生涯

荒井由泰（福井県勝山市）

池内 紀著『恩地孝四郎　一つの伝記』（幻戯書房刊）を私がコレクションしている版画や関連書籍（恩地装幀本、出版創作、詩集など）を手元において、読み返しながら、恩地の生涯をかけてやりつづけた仕事・芸術と対面してみた。ご存じのように恩地孝四郎（1891-1955）は日本における抽象画の先駆者であり、かつ日本を代表する版画家として有名だ。創作版画の創成期から戦後に至るまで、日本の現代版画が世界に飛躍する礎を作った人物だ。しかし、彼が挑戦をしつづけた創作の歴史をつぶさに垣間見るとき、彼の先見性に驚くとともに存在の大きさを実感する。

田中恭吉、藤森静雄とともに発刊した詩画集『月映（つくはえ）』での抽象作品群、「本は文明の旗だ。その旗は当然美しくあらねばならない」と生涯に数多く残した装幀本、出版創作と称する詩画集『飛行官能』『海の童話』そして詩文集『季節標』らの美しいオリジナル作品集、また、出版界にオフセット技術（写植）を駆使して出版した愛書家のための『書窓』など、活躍の場は広い。また、写真の分野においても、カメラを用いない撮影での様々な材料を使っての芸術写真（フォトグラム）にもチャレンジした。さらには廃物や日用品を活かしてのオブジェ作品も残している。版画についても伝統的な木版画技術を使った制作からスタートしたが、戦後は木版を刻らない版画（実材版画あるいはマルチブロック版画）を多く残した。これは版画というよりは現代美術の分野の作品群だ。これらの作品の多くがGHQのインテリ将校たちに高く評価され、多くが海外に持ち出され、残念ながら日本にはほとんど残っていない。

それから忘れてはいけないのが現代版画の世界で後輩の芸術家を励まし、支援を続けて、新しい道を切り開いてきたことだ。日本における知名度・評価がさらに高まり、生涯を通じての革新者としての功績にもっと光が当たることを期待してやまない。



恩地孝四郎（1891-1955）《若い世代》1951年
マルチブロック（自摺）・紙　23×16cm

コロナのせいで・・

森のテラス（しゃんぐりら）　安和朝忠（沖縄県南城市）

2019 年末からの新型コロナウイルス感染症の流行はこれまでの日本社会に様々な状況変化をもたらしている。パンデミックを防ぐ為の外出制限や商業活動の規制をはじめ、テレワークの普及やオンラインを活用した会議、研修、授業の実施、情報の伝達などが大きな変化の一端と言えよう。また、コロナの影響を受けた倒産や廃業、規模縮小など、ビジネスの世界にも深刻な影響を与えている。

この影響は当方の小さなギャラリーにも及んでいる。沖縄県南城市知念にある庭園内の自宅兼ギャラリーが新型コロナウイルス感染症の流行以来、閉館しお客様の入室をお断わりしている。目に見えないウイルスはお互いが感染者、被感染者にもなり得る厄介なものだ。それにお客様は神様との言葉もある。万が一の神様へのコロナ感染を恐れての対応として閉館しているのである。

このギャラリーの見学者は隣接するカフェ「森のテラス」へのお客様が主たる見学者となっているが、初めてのお客様や再訪者など、“団子より花”を愛でる人たちだ。お客様からは「是非見たかった。残念だ」とか、「いつオープンしますか？」との声も聞かれるが、本県のコロナの感染状況（2022 年４月５日現在）は第７波とも言える極めて悪い状況下にある。毎日 1,000 人を超える県内感染者の発表を聞く度、感染症の怖さを実感するのである。

“ゼロコロナ”とか“ウイズコロナ”とかの言葉も良く聞くが、こちらは“ノーコロナ”を切望している。花が咲き、蝶が舞い、鳥がさえずる庭園には「マスク」を着けた人の往来はちょっと違和感を感じさせる。この沖縄はいま“うりずん”の季節だ。そしてその後は“若夏”の季節が待っている。現在の私の関心は、コロナのせいで長い間閉館しているギャラリーを再開し、絵のある日常の風景を取り戻すことである。

ギャラリー内の展示物

ここに一枚の絵がある

井澤尚子（神奈川県横浜市）

ここに一枚の絵がある。

○ ある人は、この絵に巡り合えたことに感動と衝撃を受け、佇む。
○ ある人は、本や画像から飛び出した実物の絵の迫力に驚き、鑑賞するだろう。
○ ある人は、作者、時代、題材に興味を抱き、絵の背景を調べだすかもしれない。
○ ある人は、何も感動を得られずに、家に戻るかもしれない。
○ ある人は、この作品を側に置きたい、手に入れたいと考える。

そして私は、直ぐに作品の保存状態を観察する。キャンバスの様子や、絵の具層の様子、額縁の状態などをチェックする。

2012年8月、吾妻橋のギャラリー ア ビアントで開催された「わの会」コレクション展に初めて足を踏み入れた。その年の4月に修復工房を立ち上げた私を心配した阿部真也さんが、絵のコレクターさんの集まりへと、誘ってくださった。

コレクターによる展覧会という未知の世界での驚きが多々あった。詳細なキャプション、作家とのつながり、そこにはコレクターの情熱を超えた執念のようなものが垣間見えた。その後頂いた書籍『わの会の眼』にも多数の作家の掲載､略歴とコレクターの精魂を感じる文面に､これまた驚いた。

コレクターでもない私は、数年間、会の行事に参加せずにいた。送られてくる会報、会誌に何となく目を通している、というだけであった。

そこは別世界に見えたからだ。

修復を生業とする私が、コレクターからの依頼を受けることはまずない。同じ絵を見てもそれぞれの思いが違うように、時の経過と共にコレクションを愛するなら、きっとそこに修復の介入はないのだろう。傷んでいるものをあえて買おうとする人はまずいないのだろうと思っていた。当時は大手のオークションでも修復をしたことを記載しない、というのが常であった。修復の痕跡はまるで作品の価値を下げるかのように思われていた。

そんなある日、平園さんから突然お電話を頂いた。修復が必要な絵があるというのである。早速伺って作品を拝見した。コレクターさんが物故作家の作品を探し、それを顕彰し美術館などに寄託するということをその時初めて知った。

あーと・わの会で、少しでも役に立てることがあるかもしれない、と思い始めた出会いだった。

2015年12月　平塚市美術館にて「わの会」展準備
左から、井澤、堀さん、野原さん、平塚市美術館学芸員の安部沙耶香氏、平塚市美術館館長代理（当時）土方明司氏

その後、野原さん、堀さんとの初めての出会いが叶った平塚市美術館の「わの会」展（左記写真）。

私にとっての別世界の方々との交流が始まった。足を踏み入れない世界での出会いは楽しい。諸先輩方からの人生の叡智をうかがう。めぐり合わせてくださった方、めぐりあえた方々に感謝の気持ちでいっぱいである。

一枚の絵をとおして、ワイガヤ「あーと・わの会」でまた新しい出会いがあることを愉しみにしている。

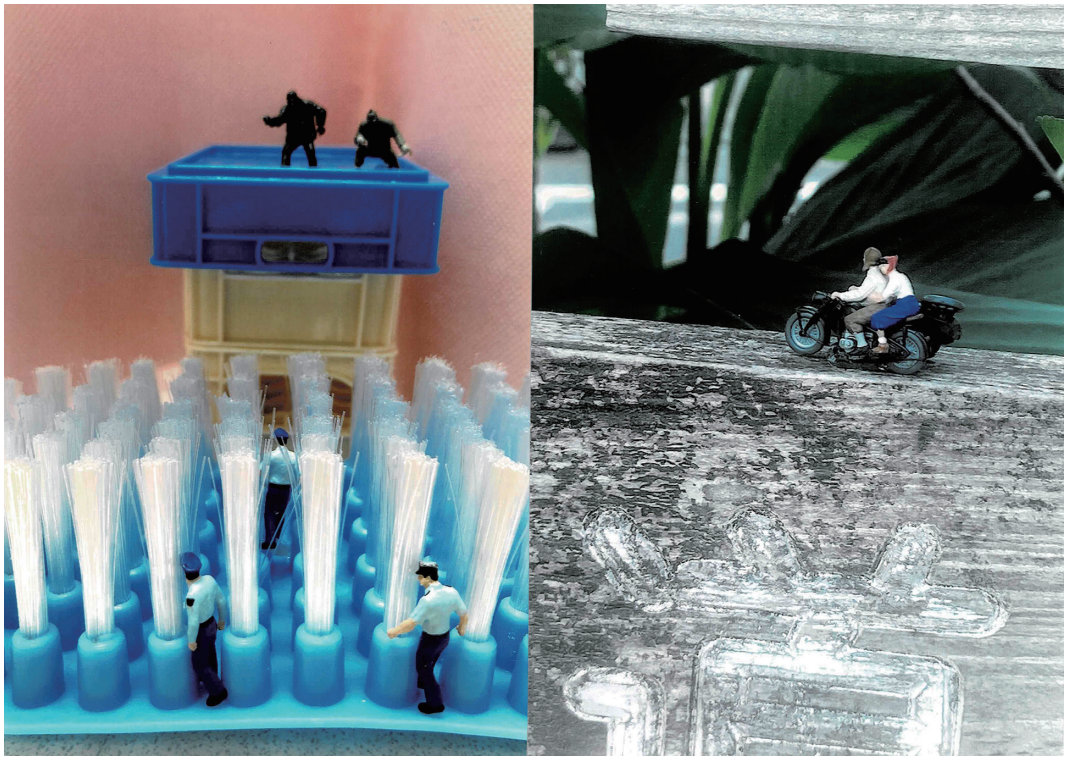
『「あーと・わの会」20 年のあゆみ』に寄せて

伊藤英一（東京都江戸川区）

コロナの影響で昨年は週 1 日は在宅勤務といった変則勤務を強いられました。そんな中、ふと、「スマホで写真を撮ってみよう」と思い立ち、さらには、「インスタグラムへ投稿してみよう」と思いつきました。「東京の日常風景」「時々英語で説明」「夜の投稿はミニチュア写真」といった感じでお盆休みに投稿を始めました。どうせなら世界の人に見てもらおうということで始めましたが、半年ほどで、おかげさまでフォロワーが約 5,400 人となり、フォロワーの 99％は外国の人となりました。我々日本人がさりげなく見ている日常風景をおもしろがったり、驚いて見てくれる海外の人に逆に新鮮な驚きを感じます。戦争で情報が遮断されているはずのロシア、ウクライナの人たちが毎日見てくれているのにも驚きます。

私は、仕事の合間に、日常風景を撮影･投稿すると同時に、世界の人たちが投稿する写真を見て、いろいろと考えたり楽しんだりしています。

インスタグラムを始めて、また海外の人たちの情報に接して感じたのは、海外の人たちは昨年あたりから NFT というブロックチェーン技術を用いた映像等の表現に積極的に取り組んでいることです。いわばデジタルデータをコピーできないようにする画期的技術を用いて積極的に情報発信しているのです。アートの世界にも大きな影響を与えると感じています。この技術については、また機会があればお話、情報交換等させていただければと思います。さてお時間があればインスタグラムを覗いてみてください。ちなみの私のサイト名は tokyoflix　です。



「放談会」2015 年の記録

伊東總吉（東京都稲城市）

普通のサラリーマン（都庁づとめ）が退職近くになって始めた創作版画の収集 ── 銀座の版画専門の画廊の店主などのお薦めなどを年に数点買い求めてきました。購入の基準はその作品の将来性で、「いま買って置かないと将来悔やみますよ…」といったお話にのって、新進若手作家の佳品を手に入れることができました。

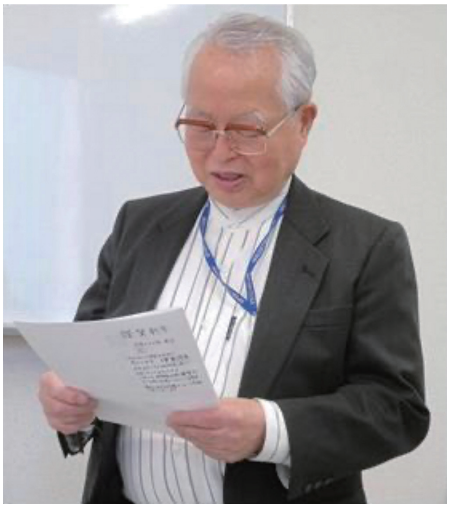
その間、縁があって「あーと・わの会」の堀さんと知り合いになり、入会させていただき早や 15 年、その間四半期毎に行われた「放談会」に、コレクションの 30 点ぐらいのなかから自慢の作品をお披露目してきました。そのときの記録を次のとおり再録します。

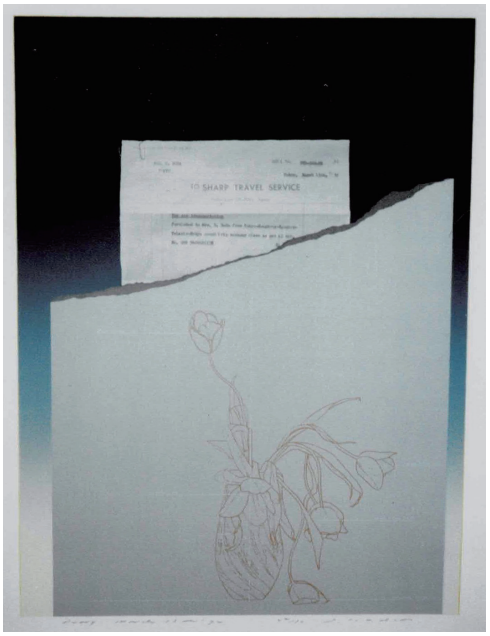
第 40 回放談会

1．日時　2015 年 1 月 5 日（月）13 時～ 16 時
2．場所　東京・京橋区民館 洋室 5 号室
3．出席者（計 11 名、敬称略、50 音順）
　＜会員＞秋山 功、伊藤英一、伊東總吉、太田貞雄、佐々木征、佐藤裕幸、杉野和夫、鈴木忠男、
　　鈴木正道、野口 勉、堀 良慶
4．司会進行：佐藤裕幸、書記：鈴木忠男、写真・編集制作：野口 勉
5．放談会の内容　発表順① 伊東總吉
　　野田哲也《日記 1972 年 3 月 13 日》リトグラフ 7 版・紙（アルシュ）
　　ED. 30　55.5 × 41.5cm　制作年：1972 年

野田の作品は和紙を使うことが多い（東京国際版画ビエンナーレ国際大賞を射止めた '68 のソファーの両親を囲む家族を描いた作品も和紙である）。一般に白黒を基調としたその後の作品とは異なり、このアルシュ紙のリトグラフは 7 版を重ね、構図も工夫されていて枯れたチューリップのスケッチも書き加えるなど手が込んでいて版画創作の卓越した技法を使った佳作ではないかと考えています。

（参考）『野田哲也全作品』（1978 年 12 月 1 日
　　（株）フジテレビギャラリー発行）
〈 談 〉 堀：珍品です。和紙は埼玉・小川のものが多い。
　　佐々木：グラデーションが見事。
　　太田：藍色がいいですね。





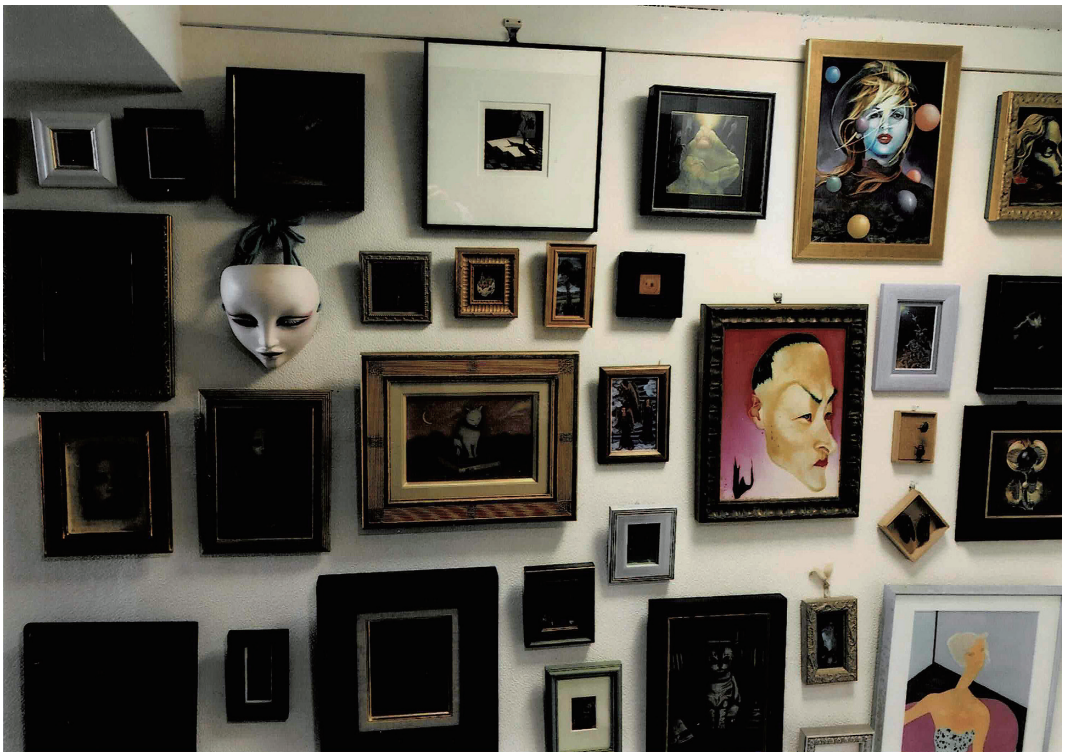
野田哲也（1940-）《日記 1972 年 3 月 13 日》
1972 年　リトグラフ 7 版・紙（アルシュ）
55.5×41.5cm　ED. 30

私の画業とコレクションの履歴

伊とうはるこ（千葉県柏市）

女子美術大学を卒業し、特許庁意匠課に就職するにあたっては、意匠課の大先輩の平野拓夫教授の就職案内に負うところが大でありました。というのは画家を兼ねているような職員も多く、画業を続けたい私にとっては、持って来いの職場だったのです。希望どおり意匠課に就職してから、しばらくしてからの事、偶然に川口起美雄先生の主催する画塾に入塾することも出来まして、以来描画も継続出来ました。その後、川口画塾の青木画廊のグループ展に参加させていただいたりしていましたが、遂に青木画廊での個展までも許されました。

絵画の蒐集はたまたま、泰明小学校の前にありましたサトウ画廊で見かけた宮下勝行さんの作品に衝撃を受けて思わず買ってしまったのが、始まりでした。それからは、職場の友人の作品、女子美大の友人の作品、川口画塾の仲間の作品、青木画廊で出品された絵画等々、多岐なものです。中でも最多のものは、自身の作品です。青木画廊での出品条件は、画廊企画ということで小品を含めて 50 点ほどが要求されました。4 回催されましたので､200 点のうち半分ほどは手元に残りました。現在自宅で 30 点ほど、別宅で 30 点ほどを展示しています。今や、老齢の域に達し、目録を作成して整理整頓しなければと思っています。



自宅ギャラリー

自己紹介

今井敬子（東京都練馬区）

私のコレクションの主なものは父今井ロヂン、洋画家の作品で、昭和時代に練馬のアトリエ村で制作されたもの、油絵 30 点です。

テーマはバラの花、風景、人物、猫などです。

作品でロヂンの画風がよく表れているバラの花、風景、人物像は、みる人それぞれに語りかける魂があるようです。「美は万物なり」というのがロヂンの哲学です。

私は「あーと･わの会」の中井嘉文氏（著書『練馬アトリエ村と周辺の人びとのその後』2014 年版）に感銘し、練馬のアトリエ村跡地にロヂンの作品及び資料を常設保存、展示し、昭和の芸術文化史の一端として残したいと思っています。

ロヂンの長女・今井敬子

今井ロヂン（1910 ～ 1994 年）

1941 年　藤田嗣治に師事
1955 年　ELISE GRILLI 女史に認められ JAPAN TIMES 紙上に批評される
1963 ～ 65 年　米国マーシャル・フィールド百貨店（シカゴ）買上
1970 年　二科会会員、審査員
1975 年　二科展会員努力賞、日本芸術絵画大賞
1992 年　サザビーズオークションでバラの花落札される
　　各地で個展
1994 年没、84 歳

今井ロヂン（1910-1994）《今様七福神》1977 年　油彩・キャンバス　F30

会員歴 20 年弱だが「門前の小僧、“経も習わず、経も読まず”」で当会末席の 85 才！（2022 年現在）

宇都宮義文（千葉県流山市）

★ 2008 年（平成 20 年）の会誌自己紹介で「美術愛好家」の肩書で「二次会参加狙い」ミエミエの会員であると宣言。で、作家作品を深く探求せずにご先祖、親から譲り受けた絵画、彫刻、書等、友人知人の作家から取得した作品等に私のささやかな人生の断片を付記して発表。

★孟母三遷（モーボサンセン）。

「其の１」私は 1949 年（昭和 24 年）の少年時代に親元を離れ養子に出た。養父の趣味で『アトリエ』『みづゑ』等が毎月送付されて来るのを眺めて暮らしていた。其の家で、洲之内徹氏が案内して来た佐伯祐三収集の山本発次郎氏や、出入りしていた児島凡平、岡本鉄四郎等の各氏に接する機会があった。

「其の２」学生時代に友人と東京芸大横の下宿で生活したことがあり芸大の大浦食堂で連日朝夕２回の食事養分補給。芸大生ヅラで芸大内を闊歩。隣接の東京国立博物館で一級の優品を観賞。卒業間際には国立西洋美術館にロダンの“地獄の門”等が搬入設置される様子に感動。卒業後農業機械メーカーに就職し定年退職迄アフロディーテ獲得以外芸術と無縁。

「其の３」退職間際に会社の同僚となった元会員の福嶋誠二氏の紹介で当会会員に。当会会員になって一番の楽しみは、各種展覧会の展示作業で多くの作品を梱包から取り出して会員各位ご自慢の作品を初めて目にする時の感動である。体育会系的会員の悦楽である。

★添付の作品は家内の友人でピエロを画き高名な米谷志保さんの作品で、私の長女のお産前祝いとして頂いた母子像で私にとって大切な《聖母子像》である。ご主人の真人（マサト）氏は、ムサビ彫刻出身で額縁作家で高名。

真人氏とはヨルトサワルト飲んだが昨年末旅立った。「俺より若いのに！！」。米谷氏夫婦は有名画家牧野邦夫氏とそのご夫人とも若い頃から懇意だったから牧野夫人も交えて有志で追悼飲み会をやらねばならぬ。

米谷志保（1945-）《聖母子像》1991 年　鉛筆、水彩・紙　48×36cm

私の「わたくし美術館」運動の原点

畝 一雄（石川県金沢市）

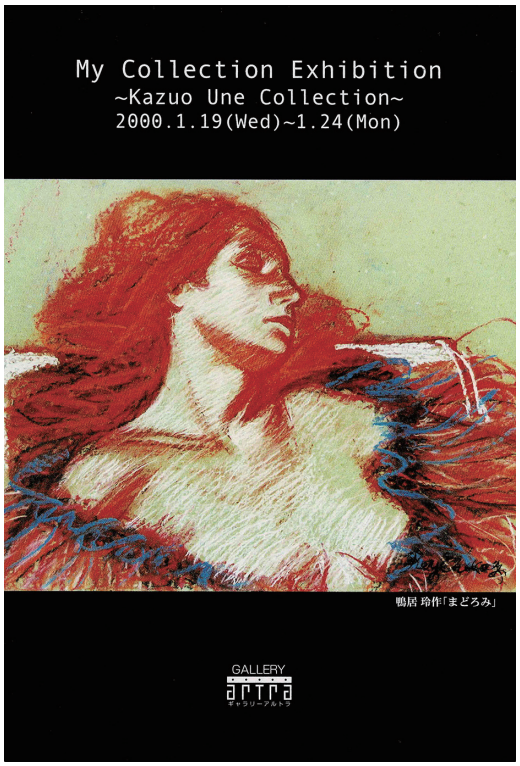
ある時、書店にて佐藤忠雄著『画廊にて』を購入し「わたくし美術館」運動という言葉になにかしら新しい魅力を感じ、ある程度作品数が増えた時、自宅ではなく、ギャラリーで一堂に会して見てみたいと思う様になりました。

そこで2000年1月19日～1月24日、金沢市下堤町の「ギャラリーアルトラ」で開催しました。新聞社3紙から取材を受けたこともあり、500名程の人々に見ていただき、金沢の文化、美術の底力を感じました。

そこから友人もでき、友人とのコラボコレクション展を共催したり、東京を含む関東の愛好家とも知ることができ、人生の幅が広がった様な気がします。

現在残っている作品は、地元の現存・物故の作家の作品です。歳が行くと郷土愛が強くなるのでしょうか。

歴代の理事長、堀事務局長お世話さまでした。皆様方いつか何処かで！



開催した展覧会の DM

左から 筆者、小倉敬一さん

コレクション、無知から知へ

太田貞雄（東京都八王子市）

１．放談会に参加

昔私の上司であった岩本 昭さんと会食する機会があり、その席で彼末 宏の油彩を手に入れたと話をしたところ、「絵が好きであれば放談会というのがあり、一度見に来たら」とのことで放談会に出席しました。当時放談会の場所は神田三省堂書店の裏のビルの３階（？）いのは画廊で、10人程が車座状態で各自持ち寄った絵の取得経緯やうんちくを披露していました。私の知らない世界の話を半ば目のくらむような感触で聞いていました。

参加者は、造詣が深く非常に研究されており、和気藹々の中にも互いに鋭いアドバイスをしていました。私はたびたび怪しげな絵を持ち込んでおり、例えば内田 巌の絵では「名前のＩの字のサインが違う」とか「この絵は明るいが、この作家の絵は本来暗い」とか指摘されたりしました。「真贋を見分けるには何度でもそのような経験をすることが大切」との岩本さんのアドバイスに勇気を得て、今でも厚かましく放談会に出席しています。

２．余談

絵を集めていると、いろいろな面白い話が聞けます。中村研一の「花」の絵（写真左）を小金井市立はけの森美術館の２階にお住まいになっている中村研一夫人に鑑定してもらいに行った時、夫人から「この絵の花瓶はこれです」と言って、その花瓶（写真右）を頂きました。同じものかどうか今でも半信半疑ですが、画家の感性が絵の表現になるのでしょう。

また小島善太郎の「椿（バック青）」の絵では、百草園のアトリエを訪ねたところ、館長を務めている次女がこの絵の裏の「八王子大丸」のシールを見て、こんな話をしていました。ある人が大丸で「椿」の絵が気に入り購入しようとしたところ既に売却済。このため直接アトリエに来たため善太郎が椿の絵を描いてあげたが、画料を取らなかった。その人は感激して謝礼として善太郎好みの黒椿の木をアトリエの庭に植えていった由。一枚の絵にも物語あり。黒椿とはどのようなものか一度拝見したいと考えているが、まだ実現していない。

中村 研一（1895–1967）《花》
油彩・キャンバス　41×32cm（F6）

絵の実物の花瓶

私のコレクション遍歴

小倉敬一（埼玉県さいたま市）

私が初めて絵を購入したのは、1983 年、デパートの催し物売り場で開催されていた絵画即売会であった。だが、そのような絵には次第に飽き足りなさを感じるようになり、銀座などの画廊で現存作家の版画や油絵を購入するようになっていった。

その方向に変化があったのは、『月刊美術』1992 年 11 月号を読んでからである。同号には信濃デッサン館、大川美術館、百点美術館、宮城県美術館の洲之内コレクションのことが掲載され、中でも、「忘れられた画家を発掘する」という東京・京橋の美術研究藝林を紹介した記事に興味をひかれた。藝林を訪れたのは、翌年春のことである。藝林の梅野さんからは、有名でなくてもよい作品を残した物故作家がいることを熱く教えていただいた。以来、物故作家を扱っている神田神保町の画廊やオークションへの参加によって、コレクションの幅は次第に拡がっていった。

大きな転機があったのは、2000 年 1 月、妻が病のため亡くなってからである。私は悲しさと虚しさの中で、画廊やオークションで懸命に多くの作品を購入していった。当時の私にとって絵を集めることは、自分自身が生きることでもあった。そうした中から、自分なりに納得ができ、心満たされる作品が徐々に集められるようになっていったのである。

そして、コレクションの核として、私の好きな画家である長谷川潾二郎と清宮質文にこだわりを持つようになり、佳品を多く手に入れられたことは幸いであった。この二人の画家には不思議と共通点が多い。精神性が高く、静謐であり詩情性があること、繊細で緻密であるが厳格に過ぎず、どことなくほっとしたものが感じられ、心癒されることなどである。私のコレクション遍歴には紆余曲折のドラマがあった。

長谷川潾二郎（1904-1988）《竹林》1946 年　油彩・キャンバス　32×41cm

私の絵画思考・絵画観

アートミュージアム・まど　金井徳重（長野県中野市）

藤井（中山）哲造は、当中野市新野に生まれ、長野市の由緒ある造り酒屋・藤井家の入り婿となった人で、書を能くし、水墨、人文画にも造詣が深く、無名の南画家長井雲坪を世に出した人でもあります。また作曲家・中山晋平は実兄にあたり、洋画家・藤井令太郎は哲造の長男として藤井家に生まれました。

藤井令太郎は、1932 年（昭和 7 年）帝国美術学校（現・武蔵野美術大学）本科西洋学科に入学。大学在籍中の 1934 年 JAN（青年美術家集団）を同志 10 人の仲間と共に創立しました。当時の画壇の主流は圧倒的な影響力をもっていた野獣派（フォービスム）であった。しかし JAN は、セザンヌから立体派（キュービスム）と超現実派（シュールレアリスム）への近代絵画の系譜に基づいた造形志向へと進み、JAN 美術展は 38 回展を数えました。

私の絵画思考、絵画観の原点は、ここ信州出身の洋画家・藤井令太郎（1913-1980）との出会いであったと勝手に思い込んでいます。

1958 年（昭和 33 年）、当時高校生の私は、中野市教育会主催の夏期絵画講習会に参加した折、初めて現・武蔵野美術大学教授でおられた藤井令太郎先生とお逢いしました。この会は、1947 年から現在も続けられている伝統ある講習会で、美術教師を中心に、絵画同好者、学生らも自由に参加できます。

藤井先生はこの講習会に、1958 年から 1971 年まで 7 回に亘り講師として招聘され、合評会・美術講話なども毎回行われ、深い造詣に対する熱弁に、60 数年前の当時が今でも鮮明に脳裏に浮かびます。

ここで私の蒐集歴 40 年を振り返ってみますと、フォービックな作品は殆どなく、具象作品が中心で、そこから派生した心象作品、幻想作品、またシュールがかった作品を大多数コレクションしていたことが、この 20 年史刊行出筆のお陰で再認識できましたことに感謝いたします。

藤井令太郎（1913-1980）《人と椅子》1958 年　油彩・キャンバス　F50

あーと・わの会 20 周年、誠におめでとうございます。

大鳳堂わたくし美術館　上村真澄（宮崎県児湯郡川南町）

「僕はね、瑛九の陰だったよ。主人公はいつも瑛九、僕は脇役だ。芸大の仕事をしないかと誘われていたんだ。だけどね、瑛九の生き方に魅了され僕は瑛九を取った」

画家加藤 正氏からお伺いした氏の言葉です。

初めて加藤氏に出会ったのは宮崎県立美術館主催「生誕 100 年記念瑛九展」のエッチング公開講座でした。「汚れていい格好で」のご指定通り私はダメージのデニムでの参加。加藤氏は当時の私を「あんなにボロボロのジーンズで参加した上村さんという人はよほど売れない画家なのだろう。絵も下手だな」とお思いでいらしたそうです。「先生、私はお手伝いで参りました」そう申し上げると先生は大層驚いた表情で私は吹き出し笑い。楽しい日々がやがて加藤氏との別れを経験し物故作家顕彰の道を歩むとは夢にも思いませんでした。

時を同じくし「先生の作品をお守りしなくては」と藁にもすがる思いであーと・わの会に入会。右も左も分からない私に扉を開いて下さったのは堀さんで、今があるのも堀さんのお陰です。

ホームページ更新のお手伝いをさせて頂く過程で沢山の叡智を頂きました。コラムニストの皆さんがお仕事の傍ら美術普及活動にご尽力なさるお姿に胸を打たれます。そして、鈴木正道さんより、大沢昌助、二見彰一等の作品をご寄贈頂きました。この場をお借りし深謝申し上げます。

さて、あーと・わの会が記念すべき 20 年を迎えます。立ち上げ当初の発起人の先輩方へ感謝申し上げると共に、巡り合えた会員の皆さんと過ごした月日は私の財産です。御礼申し上げます。

「アカデミックでなくていい。描きたいように描け。マニュアルなんか見るんじゃない」そう仰った加藤氏が黄泉の国へと旅立たれた瞬間、先生は私に美術普及活動の翼を与えて下さいました。

先生、今度は私が貴方の陰となり、どこまでもご一緒にどこまでも飛んで参りましょう。ペガサスと風に乗って。

加藤 正（1926-2016）《ペガサス》1957 年　リトグラフ・紙　47×62.4cm

あーと・わの会に入って

川崎光草子（東京都杉並区）

2005 年、梅野さんの紹介でコレクターの方々の集まりとはつゆ知らず、絵の愛好者の集まりぐらいの軽い認識で入会させて頂きました。暫くして「私ここにいていいのかしら？」と分かりましたが、いろいろ刺激も頂けて抜け出る気持ちがなくなり、ずうっとそのまま末端会員として中に居させて頂きました。

入会して少しすると、堀さんからそれ迄の数冊の会誌を見本として渡され、年４回の会誌製作を依頼されました。こんな風にとだけ。パソコンもまだ不慣れで不安だらけでしたが、お手伝いしながらだったら、気持ちも楽になりそうと思い、お引き受けいたしました。まず、費用節約のため安く引き受けてくれる印刷屋さん探しから始まりました。手書きの原稿は A4 サイズに拡大、表紙には絵の写真、カラーを希望の方からは実費を頂く、寄せて頂いた原稿は並べるのにアイウエオ順が絶対と思い込んでいたので、時々空白頁が出てしまったこともありました。段々会員数、投稿数が増え、製本の時、小さなホッチキスでは留めきれず、これは体力勝負だ、と思った事も思い出します。形として仕上げるのに精一杯だったような気がしています。

その後、太田さん、小山さんにバトンタッチすることになって、お二人の出来上がりを拝見すると、編集後記もご本人が書かれ（私の時、見かねて堀さんが書いて下さいました）全体としてゆったり感と楽しさが大きく感じられ、担当者は大事だ、私は向いていない、もっと早く交代すれば良かったと、つくづく思いました。手を離れてから会誌を丁寧にゆっくり何度も読み直すようになり、お一人お一人の文章に惹かれ、会誌の内容の凄さ、豊かさに気が付きました。

私が忘れられない事の一つに「わの会」コレクション展（誰でも参加可）があります。絵を描いている方はご自分の作品もどうぞ、と言って下さる寛大な態度に甘えて、私も腕前そっちのけ、恥ずかしさも忘れて何度か自分の絵を出品させて頂きました。その時の DM の葉書には出品作家名がアイウエオ順に並べられ、或る時、川崎光草子の次に岸田劉生とあり、思わぬ事象にびっくり、それを見せた母も大笑いして、こんな事、滅多に無いわよね、と楽しい場面がありました。

川崎光草子（1944-）《母と子》2011 年
油彩・キャンバス　45.5×27.3cm（M8）

あーと・わの会に登場する絵と自分の絵との落差は身に沁みて感じていますが、教わった事、人々との出会い、楽しさがあって抜け出なくて良かった！　と本当に思います。あーと・わの会が閉じられる事はとても淋しい気がしています。でも、堀さんが立ち上げて下さったこの会があって、そこに私も偶然に入会させて頂けたこの年月は、大きな宝物を頂いていたのだと、深く感謝しています。堀さん本当に有難うございました。

写真の代わりに不出来ですが絵を出品させて頂きます。母は４年前に他界したのですが、まだ家にいた時ふらふらと立ち上がろうとする母をぎゅっと支えていた頃に描いたものです。懐かしさもあって、今でもこういう場面が欲しくてたまりません。

ガラクタ山の中から

悠々美術館　木原達夫（和歌山県紀の川市）

社会科教員でしたので、教材として西陣織や輪島塗、京焼、南部鉄器など、伝統的工芸品をけっこう集めて授業で活用していました。けれども、あまりにも数が増えすぎたので、3点処分しようと大阪の大きな骨董屋さんに持ち込みました。

査定をしてもらっている間に、骨董屋さんに山と積まれている絵画をちょっとだけ手に取って見ました。

ほとんどすべて、無名画家の作品か贋作でガラクタ山のようなものでした。ところがガラクタ山の中に一つだけ良い作品があることに気づきました。

サインは「T.Kinoshita」と筆記体で書かれていて、間違いなく木下孝則画伯の作品です。

木下孝則画伯は東京出身ですが、お父さんは和歌山県出身で、明治大学の総長を務めた方なので、自分自身、木下孝則作品は何度も見ていました。

査定から戻ったご主人が査定額を「1万円」と言ったけど、私は「1万円はいらないから、ここにあるガラクタの中から好きな絵を1枚もらっていいですか？」とききました。「どうぞ」といってくれたので、木下孝則作品をゲットすることができました。それが、この作品です。油彩10号。《椅子に座る少女》と名付けています。

この話をブログに掲載したところ、しばらくたって「テレビに出ませんか？」というメールが来ました。何にもなしに、突然「テレビに出ませんか」なんて詐欺じゃないだろうかと疑って2か月ほど無視していましたが、それ以降音沙汰がないので、こちらから返信したら、すぐさま東京からテレビ局の番組制作スタッフが和歌山の我が家にやってきました。

この絵が「開運！なんでも鑑定団」に出演するきっかけになりました。実際､我が家に来たスタッフの方々は木下孝則作品より、朝井閑右衛門作品に心惹かれたようで、番組には、朝井閑右衛門の《薔薇》で出演することになりました。

木下孝則（1894–1973）《椅子に座る少女》油彩・キャンバス　53.0×45.5㎝

ライフワークにしている「寄贈行為」に 40 年が経過した今 新たなる嬉しい顛末記が加わりました

木村悦雄・正子（千葉県千葉市）

以下、ある物故の絵描きさんのお孫さんから頂いたメールの一端です。

『4 月 4 日（2022 年）に新発田市から絵の受領書が送られてきたのを最後に、千葉市、新潟市、新発田市との作品受領手続きが無事に完了いたしました。新潟市美術館では絵を展示していただけるとの事で 3 月 18 日～ 20 日（2022 年）まで新潟に行ってまいりました。ギャラリートークに 24 名の方が参加され祖父の絵を見ている景色を目の当たりにすることが出来て今回の一連のご褒美をいただいた思いでした。木村様ご夫妻にも、コロナ禍でなければ一緒に見て頂けた景色だなと思いました』

夫婦で絵のコレクション始めたての 40 年近く前に、宮嶋美明（1913-1985）という絵描きの作品の全記録に“何故か”没頭した。美明氏は二紀会の審査委員、役員を務め、当時のフジテレビ美術館でも紹介された。我が国の戦後洋画壇復興のために尽くした福島繁太郎氏の眼にとまり、銀座の“フォルム画廊”で何度か個展も開催した。アトリエにはそれまでの二紀会の出品作がほぼそのままそっくり残されており、100 号を中心に 200 号を超える作品も含めて 30 点近くあった。当時某医大で、解剖学に携わりながら絵を描いていた絵描きが描く独特の世界観に何か心を動かされ、妻と「この全作品を記録に残そう」と意見が一致、プロの写真家にお願いして何日かかけて写真撮影を行った。

40 年近くが経過した最近、突然今回のメールの主である宮嶋美明氏の孫であるという女性から連絡を頂き、「アトリエを壊さざるを得ず、残された作品の行き先について」との相談を受けた。そこから幾多の曲折を経て、千葉市、新潟市、新発田市の 3 か所の美術館に 10 点ほどの宮嶋作品がパーマネント収蔵されることになるのだが、作家の存命時は高校生であったというお孫さんが「40 年近く経過した今、祖父の作品を 1 点でも美術館に」という熱意を実現させるまでの間のエピソードは、1 冊の短編小説になるほどに波乱万丈なものであった。今回の目的成就のために、40 年近く前に撮影しておいた全作品の写真と、苦労をしてビデオテープを入手し DVD 化しておいたフジテレビ美術館映像の存在が大いに役に立ったということをお孫さんからお聞きし、実は「なんのために写真を撮るの ?!」と、撮影時に怪訝そうに我々に耳打ちをしてきた絵描き宮嶋美明氏から出されていた宿題に、「この日のために」ですとの回答が 40 年ぶりに与えられたことを孫娘とともに我々夫婦も喜びたいと思う。

寄贈した“宮嶋美明”作品を前にして、ギャラリートークに耳を傾ける皆さん
（2022 年 3 月 新潟市美術館にて）

美術館の出発「出しっぱなしが楽なんだ」

松山庭園美術館　此木紀子（千葉県匝瑳市）

自身が日々制作する絵画や彫刻の倉庫が手狭となっているにも拘わらず、住居の２階は此木のコレクションが山積みである。またいつの間にか古い絵が置いてある。私に隠れてこそこそと誰かを招き入れているような気配で、骨董屋から届いた茶碗を愛でているのだ。そんな暮らしが何年も続いた或る日、著名な茶道の師匠から、「弟子たちに茶道具を見せて欲しい」とか、「お宅は誰々の絵をお持ちですね、是非とも拝見したいのですが」との声が掛かり、その度に見せるのは良いが、仕舞うのが大変な仕事であった。「出しっぱなしが楽なんだが…。そうだ、文化不毛といわれるこの地で、美の楽しみを、骨董屋や画廊ではなく、地域の画家たちの発掘と子供たちの美への興味を育成するための美術館でもしようか」と考えたのが松山庭園美術館の始まりであった。

1998 年３月に設立して５周年を迎えた頃、開館したばかりの柏わたくし美術館を訪れた際、堀良慶さんが創ろうとしている「あーと・わの会」に誘われ、賛同して入会。発足以来 20 年、会の企画運営にご尽力されている堀さんはじめ皆様に、心よりお祝申し上げます。思い返せば、第２回「『わの会』コレクション展―独立展の作家たち」は当館を会場として開催し、来館者 1,500 人ほどを迎えた画期的な展覧会であった事。その後、有志による「作者不詳の名画展」など思い出深い。大川栄二氏、梅野 隆氏など、稀代のコレクターの素顔に触れられて大変勉強させていただいた事は私の宝となっている。自身の美術館の企画運営に忙殺され、あーと・わの会の行事等不義理の極みであります。2023 年は松山庭園美術館の開館 25 周年を迎えます。記念の展覧会を思う存分 BIG な企画にしたいと思っています。開館以来、私も此木の上を行くコレクター魂を養い、好きなものは手に入れる。安物買いはしない。値切らない。をモットーにやって参りましたので、更に大きな倉庫が必要です。

松山庭園美術館

あーとのちから

小松富士男（埼玉県久喜市）

あーと・わの会の皆様、沢山のご指導をありがとうございました。顧みますと私など入会の資格がありませんでしたのに「版画作品を数点持っている」と野原 宏氏に言ってしまったばかりに、「それは立派なコレクターだよ！」と煽てられてのはずかしい入会だったのです。会に入れてもらいましたところ、会員各位の人間性が素晴らしく、豊かで魅力的。すっかり会のとりこになってしまいました。放談会では、作家や作品の研究、展示や保管の仕方等々、とにかくよく勉強なされている。お一人お一人がまさにキュレーターです。なかにはご夫妻がコレクターで、毎回参加して学んでおられる姿があり感服いたしました。そういう方々が開設したそれぞれの地域の美術館を訪ねる旅行は頗る楽しく、印象に残るものとなりました。

2016 年 1 月 24 ～ 26 日には、沖縄の安和朝忠氏のお誘いを受け、野原 宏氏、堀 良慶氏、小松の３夫妻は南城市知念にある『森のテラス（しゃんぐりら）』を訪れました。ここの庭主が安和朝忠氏で、美しい知念岬に広大な観光庭園を広げておられる。周辺には多くの史跡が点在しており、かつての琉球王国の聖地で世界文化遺産の斎場御嶽（せーふぁうたき）は圧巻です。安和氏の庭園には石の彫刻や大瓶等が程好く配置され、館内には仏像、年代ものの酒器、各種壺類、絵画、版画等が品よく展示されています。素敵な庭園美術館でした。

丸木位里・俊の共同制作《沖縄戦の図》（1984 年、4 × 8.5 m）が常設展示されている佐喜眞美術館も訪れました。佐喜眞道夫館長の開館の弁、“激しい地上戦で傷ついた後も、巨大な米軍基地が居すわったこの地に人々が静かに―もの想う場―をつくりたいと考えた。『芸術の力』をかりるならば必ず出来ると想った。美術館が「心の緑陰」となることを願っている”――と。

《沖縄戦の図》を鑑賞する一行

会誌の心意気！?

小山美枝（東京都西多摩郡瑞穂町）

会誌に初めて投稿したのは私があーと・わの会の会員になった 10 年前、たしか古茂田守介が児童文学の挿絵の仕事をした話だったと記憶しています。そして、やっぱりここにあげずにはいられない大塚 武の《ベニス》を表紙にしていただいた。これで私もあーと・わの会の仲間になれた！うれしかったですね。その頃はまさか自分が会誌を作ることになるとは思っていませんでした。

もう何年か前か忘れてしまったのですが、当時の会誌担当 O さんが辞めるとのお話があり、半年ぐらい迷いましたが、会誌担当を引き受けさせていただくことになりました。その頃には「大変なことを引き受けてしまった」と思っていたのですが、大好きな松本竣介のエッセイ雑誌『雑記帳』に憧れていたのを覚えていて、とにかくやってみようと。当初は事務局の堀さんにご迷惑おかけしっぱなしで、最近になってやっと形になってきました。

原稿依頼から、ページ付け、製本など、印刷（カラーコピー）以外の作業はすべて手作業で、印刷業者さんからいろいろな最新機器のお話を伺うのですが、すべてお断りし、進めていきました。

堀さんから「会誌の心意気」を書いてください！　とお言葉をいただいたのですが、そういうのはまったくないのです。ただ真っ先に皆様の原稿が読めること、担当の特典であります。それがうれしいのです。ただ好きだとしか言えません。会員の皆様が喜んで読んでくださること、それが励みです。

皆様、ちょっとした原稿で構いません。芸術について思っていること、起こった出来事などを会誌に載せてみませんか？　ご相談お待ちしています。

大塚 武（1927-1979）《ベニス》1975 年頃　油彩・キャンバス　50.0×60.0cm
会誌の表紙になってうれしかった作品。この作品を 20 年史に残します

あーと・わの会 20 周年によせて

ギャラリー桜井　櫻井 武（東京都東村山市）

「縁は異なもの…」私が今の画商という仕事に就いたのはある人の縁からでした。近所に妻の親友の姉さん夫婦が版画の摺工房を営んでいました。そこへ来ていた、版画の版元の社長が営業社員を探しているということで、私の話題が出たそうです。その後、熱心なお誘いを受け、この美術業界の仕事に関わるようになりました。が、当時、美術特に版画の知識はゼロ。版元の仕事は、企画、制作、販売です。そして、版元の仕事は、作家に作品を依頼し、真っ新な版（リトグラフの場合は石版石）に描画してもらう。それを、摺師に運び、試摺りの作品が出来たら作家に校正してもらう。これの繰り返しの後、作品として出来上がるのです。この全過程に関わっていると、作家の作品に対する思い、版の効果、摺りによる変化等、版画の出来る過程が良く分かりました。それから、著名な洋画家、日本画家、彫刻家の先生方や摺師達との版画制作に関わるそのなかで色々と教えをいただくことが出来ました。

その後、独立致しましたが、その間に関わってくださった方々とは、今でも多くの方にお付き合い願っております。この仕事について最も良かったことは、作家の心血を注いで制作された作品をお客様に仲介出来た時です。昨日まで見ず知らずだった方と、作家の作品を通じたお付き合いが出来たりすることです。このようにして巡り会った縁を大事にすることで又、「新しい縁」が出来てきます。そんな中で、画商の大先輩である実川暢宏氏は大きな存在です。古美術から現代美術まで、美術界のことなど多岐に亘りお教えいただきました。又、業者間の交換会、現代美術のアートフェアなども誘って下さいました。ここで又、多くの同業者、作家を知ることが出来ました。あーと・わの会もそうです。会員の方々にお聞きしますと、個性豊かなコレクターの皆様が多いようですが、まだ数人の方の作品しか拝見出来ていません。これから時間をかけて、皆さんとコレクションとの出会い（縁）を楽しみたいと思っております。最後にあーと・わの会が益々大きな輪となり末永く広がっていきますように祈念いたします。

40 年来のお付き合いの画家藤森悠二さんが小社の店頭を描いてくれました

日常の美と幸運の星　長谷川潾二郎との出合い

櫻井むつみ（東京都中央区）

長谷川潾二郎は 1936 年にこう記している。“私は時々、家出して長い間音信不通の息子達のことを考えるように、私の画の運命について考えることがある。ある人が（画は画家の手を離れると一人歩きします）と言ったがそれは本当だ。運命はあの画をこれから何処へ持って行くのだろう。私は幸運の星が彼を守ってくれるようにと祈っている。”

（『夢人館 4 長谷川潾二郎』　岩崎美術社より）

私は絵に詳しくない。ただ「気に入るかどうか」に終始している。そんな私だが長谷川潾二郎の絵と出合い、いてもたってもいられず「あーと・わの会」に入会した。

2021 年 2 月。京橋あたりを散歩していると、通りかかった画廊で入札会が開かれていた。美術好きの夫が一緒だったので、ちょっと覗いてみようか、となった。

伊藤若冲、円山応挙、岸田劉生…ビッグネームぞろいの作品群から少し離れたところに、それは 1 枚だけかかっていた。

ぬくもりのある色鮮やかな毛糸玉がいくつも描かれた絵。

明るい絵だなぁ、と思った。

「知らない画家」と呟くと、夫は「長谷川潾二郎は宮城県美術館にある《猫》」が有名だよ」と言った。「非常に寡作の画家なんだよ」

夫は 2010 年に宮城県美術館で開かれた潾二郎の回顧展に行っていたのだ。

潾二郎の作品は、日常のありふれたものが画題となっているにもかかわらず、はっとするほどの美を宿している。日々の営みが特別であり、奇蹟だと、見るものを励ましてくれる。

当時、全くの異業種へ飛び込んだ私は、毎日精神的に追い詰められていた。しかし、気に入った絵が我が家にやってきたことで、大いに高揚し、（大変おこがましい限りだが）潾二郎の人生の一部を預かった気持ちになった。

ならば、より多くの人に潾二郎の絵を見てもらいたい。その道を探りたい。

その思いで、私は「あーと・わの会」の門を叩いたのだった。

潾二郎のいう、幸運の星として、彼の画を守れますように、と祈って。

長谷川潾二郎（1904-1988）《毛糸》1952 年　油彩・キャンバス　22.5×27.7cm

岡田謙三　美の世界に魅せられて
～日本的抽象画を確立した芸術家～

佐々木憲三（埼玉県加須市）

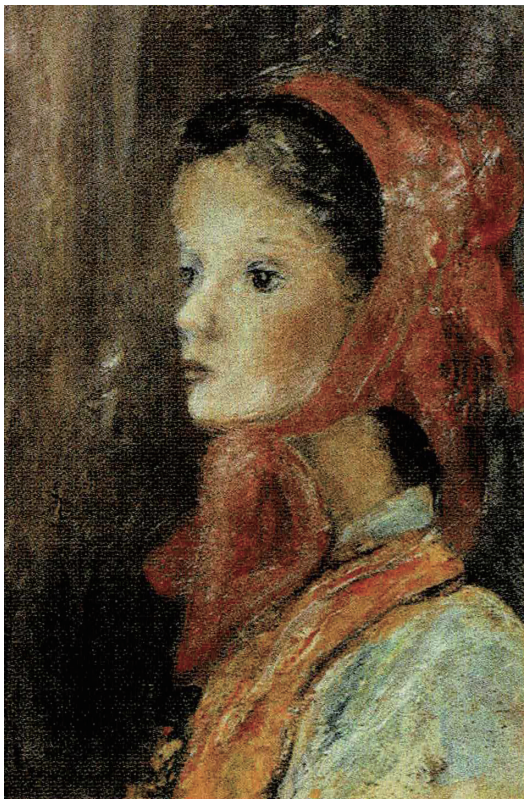
2021 年（令和３年）10 月初旬にＫ美術商から美術展入札目録が送られてきた。高額な出品作品が多いのでパラパラと捲っていたが、ある頁の小品６号の少女作品に釘付けになった。具象画でありながら色使い等に品格があるのだ。右側に岡田謙三とある。何という幸運。好機!!　オークションに申込む。多分愛好家が存在するので期待出来ない。６号提示額の６倍＋αで半分あきらめの心境、幸い 10 月中旬に入札手続き完了。落札入手に恵まれた。

次に作品《赤の頭巾》（赤のネッカチーフ）について私見を述べたい。客観的事実から作品正面左下に自筆サイン。額装は格調高く重厚。額の裏面右上のキャプションを長いが意味深いので写したい。

『岡田謙三 「赤のネッカチーフ」油彩・キャンバス・Ｐ６号・サインあり・1940 年作　岡田謙三　1902～1982　戦前は藤田嗣治の影響を受ける。その画風はモダンで抒情性に溢れている。戦後、渡米し抽象画を描き絶賛される。日本的な抽象画で成功を収めた希有な画家でもある。この作品からも抽象画に移行する片鱗(ひたい)が覗える』

作品の印象は少女の額の正中線が間違って見えたが、右側の額が見えたのでピカソ流のキュビスム的表現で、多面的であった。デフォルメ（強調）された長い首はモジリアニを連想させ（モジリアニの死後に作品を見ているかも）長い肩や腕はセザンヌの《赤いチョッキの少年》の咀嚼・応用だろうか。

作品全体に西洋的 graceful（優雅）、しなやかさが垣間見える。私は 1940 年に着目。当時日動画廊は藤田一門・二科会系の若手の展覧会を開催している。岡田は数々の国際美術展の受賞歴あり、国際的評価がある。



岡田謙三（1902–1982）《赤のネッカチーフ》1940 年　油彩・キャンバス　P6

無趣味に悩む同輩を後目に作者特定に勤しむ

佐々木征（千葉県船橋市）

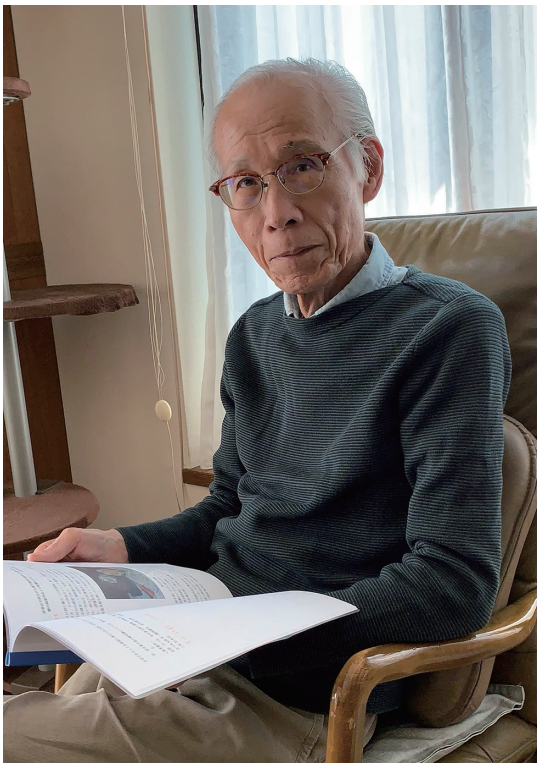
今振り返ってみると、あーと・わの会への入会は、確か平成の初めころであったと思う。そのことは忘れもしないが、岩本 昭氏（職場の大先輩）と喫茶室でご一緒したことがきっかけである。岩本氏が世田谷のボロ市で「高橋由一」の《墨水桜花輝燿の景》を掘り出したニュースを読売新聞夕刊１面 TOP 記事で目にし、一度お話を伺いたいと思っていた。そんな矢先に同じ職場の先輩が紹介の労を取ってくれた。

その後、暫くして岩本氏からコーヒーのお誘いがあり、その場で、あーと・わの会への入会を勧められた。爾来、現在まで会員として、細々と作家顕彰に関わってきた。あわよくば掘り出しも期待しつつ作者特定に挑戦し続けてみたが、その目的も果たせぬまま馬齢を重ねている。

あーと・わの会の思い出の中で、放談会のことは外せない。特に印象に残っているのは、柏市の野田哲也先生のアトリエを会員有志で訪問し、版画制作の実演を見学したこと。更には西荻窪の佐藤昭夫邸を訪問し、満谷国四郎や川村清雄などを含む 100 点のコレクションを拝見し、駆出しのコレクターにとって蒐集の醍醐味を垣間見たことからやる気をそそられたこと。展示品の中には好みの作品も数多くあったが、その後、終活からか大方の作品は処分された由、他人事ながら身につまされた。

他にも NPO 法人への移行に際し、プロジェクトメンバーとして千葉県庁に日参したことは、私にとって貴重な体験となった。それだけにNPO法人を解散することになったときは、正直なところ、一抹の寂しさと言うか、複雑な思いが私の心を過った。

コレクション展や「わの会の眼」展のことも触れたいが、紙面の都合もあり他の会員に譲り割愛させてもらった。最後に二つの事を付け加えておきたい。一つは、事務局長の存在無くしてあーと・わの会は、ここまで継続することはできなかったと確信していること。事務局長 20 年間お疲れ様でした。二つ目は、入会したことで、「素晴らしい仲間に恵まれ、活動を共にできたことは私の宝物である」と思っている。



「あーと・わの会」祝辞

佐藤 修（長野県東御市）

「あーと・わの会」が設立 20 周年を迎えられるとのこと。休むことのない活動ぶりに敬服いたしております。

ところで、古美術･骨董の情報誌『小さな蕾』に連載されている平園賢一さん（「あーと･わの会」理事長）ご執筆の「絵のある待合室」ですが、こちらも歩調を合わせるかのように節目の記念号を迎えられました。2014 年 1 月号に連載がスタートし、2022 年 4 月号で連載 100 回目。連載中取り上げた作品は 200 点ちょうど。弛まぬ研究の賜物です。因みに、平園さんが 8 年がかりで追いかけて入手したのは、沈黙の画家中山 巍の渡欧作。この『小さな蕾』4 月号に思いのたけを綴っておられます。

インターネットの「待合室」の入り口にはこうあります。
――力ある忘却・埋没作家の発掘顕彰を目的としたコレクションです。高名高額な作品はほとんどありませんが、日本美術史の隙間を埋めるお手伝いが出来れば幸いです。先入観なく肩の力を抜いてご鑑賞下さい。

この趣意はそのまま我々の先達である梅野 隆さん（故人・東御市梅野記念絵画館初代館長）の美術蒐集の理念と重なります。梅野さんは、蒐めるだけに留まらず、調べる、発表する、展示する、図録に残す、という行動派のコレクターでした。その成果としての産物が梅野記念絵画館であり、「梅野記念絵画館友の会」であり、「あーと・わの会」だと思います。

今後ともそれぞれが切磋琢磨して日本美術史の隙間を埋める活動を続けていかれることを心から願います。

中山 巍（1893-1978）《窓》1926 年　油彩・キャンバス　116.7×80.3cm

「傑作力作」を入手する苦労と歓び

シェイクスピア・ギャラリー　清水あつし（東京都千代田区）

絵画を集め始めたのは、ほんの１年少し前である。小生古本から始まり、浮世絵や明治版画、そして古写真など蒐集している時に定年を迎えて、３年前お茶の水駿河台に「画廊兼古書店シェイクスピア・ギャラリー」を始める事になった。そして最近特に、1920 年代の日本人画家の滞欧作から戦後までの近代洋画を集めている。好きな画家が特にいる訳ではない。ただ、有名な大家のデッサンや版画はほとんど買わない。また、高度成長期にデパートの美術部が売りまくったような作品、花や静物といった家庭用の売り絵も勘弁願いたい。私の収集とは、素晴らしいと自分が思える絵を買っていたら、それは画家の青年壮年期の力作、傑作だったという事だ。私に言わせれば美術館級作品だ。だから 10 号以上の比較的大きい絵が多い。

さて初めて画商の紹介で「交換会」と称される、業者の競り市に行った。私は小心者なので胸がドキドキして、肝心な時に声が出ないと心配で、地下鉄車中で「25 万、30 万、35 万…」と大声で練習する。しかし本番では、熟達の画商たちに圧倒されて太刀打ち出来ない。口をパクパクして声が出ない間に競りは終わっていた。

いや肝心な事を書こう。私が欲しいような絵は、交換会に 1,000 点あってもまず無い。ポピュラーな絵画が市場の 99.999％を占めていて、まず出て来ない。何も買わず、帰る日ばかりなのである。そしてこれは誰が見ても素晴らしいという傑作は、とても高い。画家の相場が 50 万円程度で、さていくらなら買えるだろう等と踏んでいると、これら傑作は激烈な争奪戦となり 100 万円以上まで値が上がったりする。一流の傑作を結構な値段で一流顧客に提供できるのが一流の画廊であり、零細業者や普通人にはまず勝ち目はない。

皆さん「傑作力作」が買いたいのなら、もし眼前に現れた時には躊躇なく突進して押さえるしかない。人生で何度と無い僥倖だ。そんな家蔵の傑作を「わの会」の展覧会に出展できる人は、やはり目利きとして一目置かれるのだなあ、と先日柏市の会場でも思った。本会に出会った時の感想である。

2022 年３月　当「シェイクスピア・ギャラリー」の「エコール・ド・パリから 100 年展」

「あーと・わの会」放談会に出会うまで（絵画ことはじめ）

杉野和夫（千葉県流山市）

第二の人生、なにをすべきか迷うところ。まず会社を作ろう。定款には何を入れようか。順番が逆ではないのか。わかっています。定款の一つに美術品の販売を入れた。しかし取り扱う商品がない。業者間のオークションで絵画の購入を始めるも、どうも自分が意図するものと違った。

画家のアトリエ訪問を行い、自分が気に入った作品１点を所望したところ、２点以上を購入するのがマナーだよ、とアドバイスされた。

絵画とは何か。どう描くのか。自ら絵を描いてみなければわからない。ある日展会員のやさしい日本画教室で水干を習い始めた。真贋はどうして見極めるのか。真贋についての本を読み漁った。

勉強の為、大手ネットオークション会社で岸田劉生の絵画１点を購入。日動画廊の証明がされていたので作品を画廊に持参した処、案の定証明書が偽物といわれました。画廊では贋作証明は一切しないとのこと。

要するに贋作については東京美術倶楽部等の「公的証明」はほとんど取り付け出来ないということがわかりました。

当該出品業者に全額返金しなければ有印私文書偽造にて警察に告発すると警告した処、ようやく全額の返金を受けたので当該作品を返品した。

ところが２ケ月後、同作品が同社で再度出品され、先に私が落札した価格より更に高い価格で落札されていた。贋作でも「商品」であることをあらためて認識いたしました。

その後、同社で数十点購入しましたが半数は偽物でした。自分が偽物と確信した作品は、出品業者と交渉、お金は全額回収し、作品は全て返品しました（真贋についての勉強の成果か）。

そのような遍歴の中にあり「あーと・わの会」をネットで知り、これぞ求めていたもの。とりわけ放談会に憧れました。早速、堀事務局長さんのご自宅に伺い、入会無理かなと思いましたが快く許可をいただきました。

入会し会員の方々と交流して、まず驚いたのは各会員の美術品及びその周辺知識に対する見識の高さです。自分にはとてもついていけないと認識しました。

二人の物故コレクター梅野 隆さんと岩本 昭さんのこと

鈴木忠男（東京都江東区）

JAA 会員当時、その目録巻末広告に美術研究藝林もあり、物故作家顕彰の変わった画廊が東京京橋に開廊したことは知っていたが２年後（1987 年４月）「手袋が首つりした」様な絵（伊藤久三郎）が掲載され興味を持ち訪問した。梅野から画集函絵の《猫電気》やデッサンを大川が購入したと聞く。その画集は源喜堂書店で買えた。１階で最後の遺作展をやったときには喜美子未亡人と話す機会もあった。中村忠二については藝林で知ったのか、いや『花と虫とピエロと』（自筆画１葉入り）を既に持っていた。忠二作品１万点の内の千点位を梅野は買ったのだろう、自費出版の『蟲たちと共に』など計５冊も手に入った。菅野圭介を知ったが高いので買う事が出来なかったがフジヰ画廊での個展を知り初日に行ったら中止になっていて（古物商許可云々で新聞に出た影響だろう）、梅野にその件を話すとそれを知らなかった、その後すぐに行き大作を購入したのだった。亡くなった年の正月に「松井冬子の絵を持っていますよね」と初めての電話があり、最近の画家にも興味があるのかと感心した。

岩本に初めて会ったのは山田書店で、あの人が『わたし流美術館』の著者かと先代の主人に尋ねた。1997 年 11 月の靖国神社の骨董市で鬼太郎（業者）から購入した「大和絵片（歌人）』（土佐･住吉派）を見せ、これはどうですかと聞いたのが口始めだった。その後は東郷、花園、富岡の骨董市で会えば挨拶を交わすようになり、平和島骨董まつりでは掘出品の品評会を松尾らと休憩室で開き、あの店に珍しい物故作家の作品がありましたねとかの情報交換が２年程続いた。古書市の目録から３冊予約し１冊『菅野圭介日動画廊第１回個展図録』だけ抽選で当たった、その注文者リストに岩本の名前があり、梅野が２度目の退院をされ、これをお祝いに渡したとき（梅野の希望で譲ることになった）、岩本も藝林にいて我孫子画集（私も予約した）を手に入れたと話していた。鬼太郎に会うと、岩本が奥さんと一緒に来て以来こないのでどうしていますかといつも聞かれ、亡くなったことを報告したら、経堂の自宅に本の買い取りに行ったが、絵画は見せてくれなかったとのこと。（敬称略）

絵にかける思い

池之端画廊　鈴木英之（東京都台東区）

私が幼少の頃、母方の祖父で日本画家であった望月春江はたびたび、こう尋ねた。「大きくなったら何になりたいか？」たしかその時、怪獣の着ぐるみに入っている人とか、色がみやさんとか答えた様に記憶しているが、祖父は「絵描きはいいぞ。絵描きには定年が無い。会社勤めだと辞めなければならないが、ずっと描いていられるんだ」そう言っていたことを思い出す。

その時、子供ながらに、絵描きは一生死ぬまで描き続ける仕事なのだなと悟ったのだった。事実祖父は絶筆の大輪の向日葵を描きあげたとき、その作品を搬出する際のうしろすがたは全てを出し尽くした抜け殻のようであった。画家とは最後の最後まで命つきるまで制作に挑み続けるもの。そのことは首が曲がりながら、今朝描き上げて作品を搬入した、春江の娘で 90 歳になる日本画家の私の母、鈴木美江を見ても自然とそれが伝わっているように思える。

また、もう一人の父方の祖父で洋画家の鈴木千久馬も、晩年病室のベッドで意識混濁の中、天井に向かって指を動かし続けていたという。指を絵筆に天井をキャンバスに見立てていたのであろう。たとえ身体が自由にならずとも、描く道具などなくとも、死の淵においてさえ、なお制作の意欲を失うことはない。絵にかける執念、執着のようなものが、現代とは違うように思えるのだ。

二人の祖父のこともあって、画廊では物故作家の展示も色々とやってきた。その度にそれらの作品には何かを超越した凄味があるように思えた。それはどこから来るのだろうか。特に明治生まれの作家は戦前、戦中、戦後と激動の時代を制作一筋に貫いてきたことは、どれだけ大変だったことだろう。春江は子供 3 人、千久馬は 6 人をその時代を絵だけで養ってきた。ゆえに絵にかける思いが違うのだと思う。絵描きとは何かを教えてくれた両祖父に心からの尊敬の念と、感謝の気持ちと共に、自分も少しでもそこに近づきたいと強く思った。

池之端画廊（東京都台東区）

「断捨離」とわたくし

鈴木正道（千葉県柏市）

私が駒井哲郎氏の《笑う幼児》を求めたのは、1975年２月、ささやかな小コレクションの始まりであった。いま87歳、人生の黄昏時である。10数年前、妻が難病と診断され、収集品をどう処分すべきか、悩むようになった。70歳をとうに過ぎていた。2011年６月、敬愛する二見彰一氏の個展が、神奈川県立近代美術館で開催された。早速、担当課長の橋 秀文氏に水彩画４点の寄贈を申し出た。快く受け入れてくれた。その数年後、大沢昌助氏の版画を宮崎県のＫさんに寄贈。さらに昨年、Ｈ氏コレクションと合わせ、大小70点余の二見作品を寄贈した。コロナが終息し、彼女の美術館で展示される日を楽しみにしている。さらに５年前の６月、群馬県のコレクターＡ氏が、大沢昌助作品のうち、油彩、水彩作品を引き受けてくださった。過分な御礼までいただいた。

相笠昌義氏の油彩画10点は、知人のフレンチ・レストランのオーナーＳ氏が買ってくれた。感謝に堪えない。Ｓさん、ありがとう。

一方、画商を通じ、処分をお願いした。買値より高く売れた作品は、前衛作家のものであった。中川幸夫、鈴木 治、篠田桃紅、とくに桃紅作品20点余は、すべて買値より高かった。桃紅作品の人気は、外国人にとって、日本刀の切れ味に通ずるものがある。当会のシャーロック・ホームズことＳ・Ｓさんの言葉、慧眼と言えよう。その他の作品は、買値の何分の１かであった。昨今の経済不況を考えると、已むを得ないことであろう。

最近､私は石川 淳氏（1899-1987）の最晩年のエッセー集『夷齋風雅』を通読した。氏は蕪村の『新花摘』に触れ､こう言う。「ほしいものは手に入れる。見たいものは見のがさない。取れば手中の珠、離せば天外の虹、こころは所有の観念にしばられてゐないやうである」。そして狂歌一首、

あるほどの物みなひとに呉竹の世を酒にしてあそぶ月花

しがない勤め人夫婦がヤリクリして買った作品たち、想い出は多々ある。手放すことはつらい。だが、それ以上に安堵感が強い点は、否めない。負け惜しみをいうな。この小心者めが――

ポートレート　2022年３月

あーと・わの会との出会いと私の美術普及活動

髙木巧治（岡山県勝田郡勝央町）

Ⅰ　私は、30 歳から版画中心のコレクションを始めてきました。

Ⅱ　1999 年には公立美術館で個人コレクション展を後輩の学芸員の勧めで開催しました。それ以降、公立美術館や公立施設で美術普及活動をしてまいりました。特に美術館では、私のコレクションを無償で貸し出して企画展を開催していただき、美術館の経費削減を働きかけてきました。
―公立美術館で個人コレクション展を開催する会を主宰し、岡山県内外で数十回開催し、来館者数は３万人超えます―

〈 事例 〉

1999 年 髙木コレクション展「15 の表現」（奈義町現代美術館）
2004 年 髙木コレクション展Ⅱ「挿画本の世界展」（美作市作東美術館）
2005 年 髙木コレクション展Ⅲ「オークションでのコレクション」（勝央美術文学館）
2007 年 髙木コレクションから「藤田嗣治の版画」（勝央美術文学館）
2010 年 Ｔ氏の小さなコレクション展（勝央美術文学館）
2013 年 北斎・廣重ヨーロッパを魅了した「江戸の絵師」（勝央美術文学館）
2015 年 魅惑のサラリーマンコレクター髙木巧治 25 年の軌跡（勝央美術文学館）
（当「魅惑のサラリーマンコレクター展」は内閣府委員会組織のアートコモンズ･ジャパンサーチに記事掲載）

Ⅲ　2017 年 勝央美術文学館に作品寄贈と美術普及活動により、紺綬褒章を受章。

Ⅳ　あーと・わの会に入会後に、私の美術普及活動と、あーと・わの会の美術普及活動を、国会の議員会館（副大臣）に紹介、陳情、同時に文化庁のヒアリングを受け、あーと・わの会が文化庁に認知いただけるきっかけとなりました。

Ⅴ　入会して８年となりました。私の長年の思いでありました、画家（銅版画家）としても現在、活動しております。

Ⅵ　2022 年３月日本学術会議の協力学術研究団体である日本美術教育学会会員。2022 年６月日本美術著作権協会 JASPAR の作家となりました。

2015 年「魅惑のサラリーマンコレクター髙木巧治 25 年の軌跡」展のオープニング式典（勝央美術文学館）

私にとって絵とは

田中 実（埼玉県ふじみ野市）

あーと・わの会の放談会に参加させていただいて感じたことは、皆さんの研究の熱心な努力はもとよりそれをとても楽しそうに語っている姿がすごく印象に残っています。自分の好きなことができることは幸せだと思いました。

かつて大川美術館に行ったとき大川栄二館長から「この美術館で絵よりも人として大切なものをひとつでもいいからみつけてください」また「絵はあくまでも人間性を高めるための手段」との言葉に「ハッとした」ことを思い出します。

その後、私の身近な人に私が天狗になっているとき軌道修正していただいたおかげで今まで社会人としてなんとか歩んでこられたと省みています。

今はいろいろ考えることも多いですが、自分の好きな絵をみながら自分の好きなことを楽しく生活できることがいかに大切で幸せであるかということを感じております。

古希を過ぎ　半生を振り返る機会を持てて

谷 吉雄（石川県白山市）

“絵を持ちたい”という欲求、それは突然襲ってきました。44歳の時に約30年ぶりで再会した従兄を訪問した時です。居間に掛けられた鴨居 玲（当時は全く知らず）の人物像が目に入り、一瞬で魂を奪われた情態になったのです。それまでも絵に関しては多少の関心を持っていて、洲之内徹の『絵のなかの散歩』など美術エッセイを読んだり、なぜか無性に心惹かれた信濃デッサン館を毎年訪れていました。しかし、これまで絵を購入したいという空恐ろしい思いは全くなく、まさに青天の霹靂でした。そして不運なことに、金沢には鴨居の作品を扱える画廊がありその扉を叩いてしまったのです。それからは蒐集（購入）するという毒薬を口にしてしまい病膏肓となりました。ただ幸いにも、ここで二人の絵画コレクションの大先達に巡り会えました。そして蒐集の方向は大川流に、またその情熱や画家へのアプローチの方法は梅野流にと多大な影響を受けました。いいえ、正しくは二人の全くの後追いでしかなく、二番煎じどころか出枯し状態で、そのレベルは口にするのも憚られます。やはり個人的な欲求から始まった自閉症的で自己救済のためのものでした。

しかし2008年、地元で開催中のTコレクション展を当時の野原会長と堀事務局長が見に来て下さり入会のお誘いまでいただきました。それ以降は、会のコレクション展への出品や『わの会の眼』の図書出版にも参加・投稿させてもらい、井の中の蛙状態から少しだけ対外的に発信することができ、視野も拡がり社会とも繋がりを持てるようになりました。なんとか地方に居ながら今が在るのも本会に加えていただいたお蔭と心から感謝しております。

稿を終えるにあたり嬉しい御報告を！

有難い御縁で、初めて地元を離れ岡山の笠岡市立竹喬美術館で“谷コレクション”展の開催が決まり、図録作成に取り掛かり始めました。（2022年12月24日～2023年2月12日）

此木三紅大先生と共に歩んだ美術館

ほくさい美術館　田部井仁市（埼玉県加須市）

ほくさい美術館は、コレクターの田部井仁市が収集した作品を地域の皆さんに鑑賞していただき、芸術活動の活性化と文化の向上を図ることを目的に、2009 年 6 月にオープンしました。コレクションの中心は芸術家・此木三紅大氏の絵画とガンダ彫刻です。きっかけは氏のガラス絵に出合ったこと、具象や抽象、平面や立体というジャンルを超えた多彩な芸術作品に惹かれ、以来長年に亘りコツコツと蒐集してきたものを展示公開してきました。

オープン以来 13 年間の主な展覧会は、「わの会」コレクション展、猫たちの遊々展、ガラス絵展、扇面画展、加須市の作家展、個展、コレクターのコレクション展等、多岐に亘るものでした。特に、人気の「猫たちの遊々展」は今回で 12 回目というロングランの開催となっています。また、当美術館では毎年、美術館見学ツアーと称し、人気の美術館を巡る日帰り旅行を実施し好評でした。

此木三紅大氏、前・あーと・わの会理事長の野原 宏氏及びあーと・わの会事務局の堀 良慶氏におかれましては、多大なご指導、ご協力をいただきましたこと、この場をお借りして感謝申しあげます。

（上）ほくさい美術館正面、（下）「猫たちの遊々展」会場

私にとっての「あーと・わの会」

田村和司（京都府宇治市）

何年前になるでしょうか、埼玉県立近代美術館で開かれた「菅野圭介友の会」の席上、突然、梅野 隆さんが私に何か話すように言われました。驚きましたが菅野圭介作品との出会いやその後の資料集めなどを話しました。

終了後、堀さんが入会を勧めてくれました。それから２年近く私は入会しませんでしたが、堀さんは私にあーと・わの会（以下、わの会）の資料を送ってくれました。私はそれをすべて無視しました。今でも堀さんに無礼なことをしたと思っております。その後、だんだん歳をとるにつれ考えが変わりました。誘われたとき、コレクションの楽しみは個人的なことと思っておりました。その考えが年月とともに変わり、今があります。

わの会は芸術、特に美術を愛する人たちの集まりと思っております。会誌や行事などいろいろな場での会員との交流や情報交換がどれほど素晴らしいことか、それは会の中に身を置いた者にしか分からないと思います。私の場合、特にそうです。同好者の集い、これは人生を生きていく中で欠くべからざることと思います。

昔、“群れる”ことに嫌悪感を覚えることが多々ありました。特に芸術の愛好はひとりが一番、人は人。これで頭は固まっておりました。が、しかし、そうではない。わの会に在籍することでこの考えは変わりました。

入会の契機となった菅野作品を紹介します。菅野 29 歳、日動画廊で開かれた第１回個展の出品作です。彼の若い時の作品は空襲でほとんどが失われております。これは京都にあったもので戦災を免れたわけです。作品の良し悪しは別にして菅野作品を研究する資料として、貴重な物と自負しております。私は入会の契機となったこの作品と共にわの会の今後を見つめていきたく思います。

菅野圭介（1909–1963）《緑の風景》1938 年　油彩・キャンバス　50.0×60.7cm

美術との関わりから「かがみの近代美術館」開設まで

かがみの近代美術館　辻本髙廣（岡山県奥津温泉）

2018年4月に岡山県の奥津温泉に「かがみの近代美術館」を開設。2023年4月に5周年を迎えます。私はサラリーマン出身で美術界との関わりは薄く、「美術館をつくる」なんて全く現実味の無い話でした。単に学生時代から登山・スキーで親しんだ「信州に住みたい」と願い、30代前半には土地を購入。金融マンとして激務の中にあっても、季節を感じては自分の土地に「今頃、カタクリの花が咲いてるだろうな」とか「カッコウが鳴いてるかなぁ」と時折空想しては「まったり」となっていました。

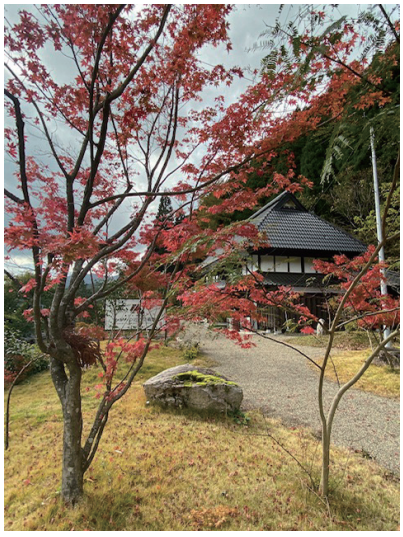
一方、コレクションを始めたのは20代後半で、その頃は巨匠の小品を中心に買っていましたが、他にも、白髪一雄さんの水彩（油彩を買えばよかった）や、先頃、東京藝大の学長になられた日比野克彦さんの作品なども買っています。

コレクションの転機は、1993年に大阪なんば高島屋で開催された「夭折の洋画家たち展」を観たことでした。会場には青木 繁・関根正二・村山槐多・三岸好太郎・松本竣介などなど夭折画家の小品が並び、野田英夫の《メリーゴーラウンド》に感動したり、靉光のボロボロのデッサンに愛おしさを感じたり…と色んな思いが駆け巡ることとなりました。丁度これまで買っていた大家の作品に違和感（美術館に行けば大きな作品がある）を感じていたこともあって方向転換の切っ掛けとなりました。その後、「あーと・わの会」創立会員の岩本 昭氏の図書を読んで、「自分の眼で価値を見出そう」と思うようになりましたが、正直なところ、洲之内徹氏や岩本 昭氏の紹介されている画家の作品も結構買いましたので、自分流へと自立できたのか微妙な状況です。

時が訪れ、奈良県の某スポーツ連盟の会長を務めていることもあって信州はあまりに遠く、似た風土の現在の場所に「不遇の画家の生きた証」として、また「ひとりの名もなきサラリーマンの生きた証」になればとの思いで「かがみの近代美術館」を開設しました。

≪略歴≫

1957年　奈良県北葛城郡王寺町生まれ
1979年　大学（経済学部）卒業し、金融機関入社
2017年　岡山県苫田郡鏡野町の江戸末期建築の古民家を購入しリノベーション開始
2018年　リノベーション完成（2月）、金融機関退社（3月）、美術館開設（4月）
2019年　ＯＫＵＴＳＵ芸術祭を開催、2020年、2021年、2022年と開催
2021年　岡山県立美術館講演会（岡山県博物館協議会30周年記念事業）



かがみの近代美術館

痕　跡

摘水軒記念文化振興財団　寺嶋哲生（千葉県柏市）

ぬり絵なら兎も角、白紙に絵を産み出す苦悩はいかばかりか。有史以来、あらゆる趣向が凝らされて、膨大な量の美が産み出されて来たにもかかわらず、まだあるかもしれない新たな表現の可能性に己が感性と技術を凝縮する。僕には到底できそうにないチャレンジを続ける芸術家に、敬意を表します。なぁるほど、こんな隙間があったかと、多くの才能と努力が結実した結果だけをニンマリしながら摘み喰いする。幾許かの対価を支払うものの、コレクターとは安直な身分と言えましょうか。

時間の淘汰を経ても尚色褪せる事のない業績を残せた者を天才と言うのであれば、天賦の才を与えられた者は極僅かでありましょう。不可抗力である才能の有無に関わらず、一芸に執着し続けて、しかし時の流れに埋没していく大半の者達。その痕跡が朽ちていくのは、如何にも口惜しい気が致します。天才の片鱗と、無銘の痕跡。どちらも、等しく一人の人間の生きた証である事に違いはない。産み出されては消えていく膨大な人間業の、取るに足らない程にささやかな、ささやかな収蔵品であります。これもまた、一人の人間の痕跡ではございましょうか。

十数年前、道半ばで出版した所蔵品図録の冒頭に記した文章です。今読み返しても、全く違和感はありません。もう止めようかと思いつつ、最後にこの一点だけは加えよう。そんな事を未だに続けております。恐らくは、こんな人達の集まりである「あーと・わの会」が 20 年続いた事、そしてあと何年続くのでありましょうか。

まずはまずは、皆様、お互いおめでとうございます。

岡本秋暉（1807–1862）《蟠桃飛鶴図》1853 年（嘉永 6 年）　紙本着色　127.3×65.0cm

青い地球に住み続けたい

富山市にミニ・プチわたくし美術館　徳永幸子（兵庫県神戸市）

青い地球に住み続けたいと願うばかりで、そのためには自分はどう考え動けばよいのか？　自問自答してはみるが、やはり逃げ腰、傍観者です。今まで自分なりに努力して培ってきた美術活動を、平常心でもって粛々と続けて行く事しか思いつきません。

７才（小１）の 1945 年８月２日未明の富山大空襲でいくつかの奇跡が重なり無傷で助かりましたがこの日から着の身着のまま寝ることも食べるものもない状態が長く続きました。56 才（神戸市の美術科教員）の 1995 年１月 17 日早朝、阪神・淡路大震災で家は全壊。紙一重で外に出ましたがまたその夜から寝るところもなく、職場も避難所となり、親の介護もしていて疲れ果て、57 才で退職しました。“二度あることは三度ある”と恐れています。

その後六甲アイランドのマンション７階に住んでいます。美大同級生の夫は教職中も、着々と絵画制作に励み、毎年個展を開いてきました。私も退職後に本格的に描き始めました。

絵画の啓蒙活動にも興味があり、絵画サロンを開き 23 年目になりました。２人の作品がどんどんたまり、夫と美術館を作りたいねと学芸員資格も取り、他の人の作品もあり、美術館としての内容には自信があるのですが、肝心の資金はゼロです。マンションの部屋（1996 年から）をハッピー美術館と名付けて友達を呼び楽しんでいましたが、制作中心の生活で整理がつかなくなり中止。ご縁があり 2019 年にミニ・プチわたくし美術館を富山市にある弟（東京在住。画家）と共有の納屋とアトリエを改造して作りました。しかし神戸から遠く常設というわけにはいきません。

世界中を巻き込む病原菌の発生、異常気象による災害の多発、地震などの自然災害、そして一番恐れていた人間同士の殺し合いまで始まってしまいました。神戸での個展、グループ展など活動は途切れず続けています。今夏（2022 年８月 12 日～ 16 日）は我が美術館主催で大きな会場を借り（富山県民会館美術館）弟と甥（彫刻家）の２人展を開催しました。

政治、経済の混迷も加わり先行きがますます怪しくなってきました。この美しい地球を横暴な霊長類とうぬぼれる人間から守るのは誰か？　何か？　人間の英知ではないのか？　私はただ願うばかりです。

徳永幸子（1938-）《自画像》油彩・キャンバス　各 F4 号　20 代～

私の人生の心の隙間、哀しみを埋めてくれるもの

中柴雅彦（山口県周南市）

人間の一生とは、「不可抗力」即ち、抗えないことが多いことに気づく。例えば、先ずは、生まれてきた時代、国、土地、親、性別、先天性の病等、既に自分の意思や努力とは関係ないところで決定されているのは、私の言葉で「絶対的運命」或いは「宿業」は存在する。

美術の側面から、その事を考える時、世界的な話になるが、信じる宗教が違えばバーミヤンの仏教遺跡も、破壊の対象となる。現在、ロシアによるウクライナ侵攻も、沢山の美術的価値のある建造物や美術作品も数多く破壊されていることであろう。美術品も、ある意味戦争の犠牲者ではないだろうか。

日本も例外ではない。明治期に始まる廃仏毀釈や、太平洋戦争時の美術品の焼失、最近話題の大阪中之島美術館の生みの親とも言うべき山本發次郎の佐伯祐三コレクションは、殊に有名だが、それでも佐伯祐三作品の多くは、神戸の空襲で焼失したと聞いた。

本当に、人間とは愚かなものだと思う。美術品に限らず、すべての事柄は「失って初めて気づく」ことの何と多いことか…。しかし失ってからではもう取り返しがつかないのであるが。

先述した山本發次郎の有名な言葉に「蒐集もまた創作なり」があるが、画商や古美術商に言われたまま購入するのではなく、自分の眼を信じて蒐集するということは、現代の若手起業家にみられる現代アートの己の投機的資産価値を求めて購入するスタイルとは矜持が全く異なる。山本發次郎の佐伯祐三コレクションは、自分の心を慰めてくれるもの、或いは、佐伯祐三へのシンパシー故の使命感であったかもしれない。そういった意味で、山本も、また孤独であったろうと思う。

今まで、途方もなく大きな話を述べてきたが、それは、私のコレクターもどきの人生など取るに足りないものであると率直に感じているからに他ならない。いつも、あーと・わの会の諸兄姉へ尊敬の念を感じている。私には、到底及ぶところではないが、自分の「与えられた定め」の中にあって、心の隙間を埋めてくれる慰めとして出来る限り蒐集活動を続けていければと思っています。

國田敦子（1923-2003）《ノルウェー湖畔》制作年不詳（1980 年頃）
油彩　Ｆ６号　韮崎大村美術館所蔵作品

アーティストとして。コレクターとして。

永津照見（兵庫県神戸市）

フランス留学中一時帰国していた2004年の夏、あーと・わの会会員の三浦 徹先生に作品を購入して頂いた。それから数日後、先生のコレクションを拝見し衝撃を受ける。それは松村光秀、タカハシノブオ、小出三郎など、画面から豊かな物語を感じられる素晴らしいコレクションであった。アートには情念、難解、意外性そして愛が必要であると。当時主流であった「絵画は終わった」などとうそぶく金沢の美大とは縁を切った。まことのアートの力で私の人生は変わったのだ。

私はアーティストとしてコレクションをしている。小出三郎、吉岡 憲、寺島紫明、Maurice Pasternak（モーリス・パスターナク）など優れたデッサン力を基礎とした品格ある作品に心惹かれる。彼らの作品をアトリエに飾って、恥じないよう負けないよう仕事をするのだ。この姿勢は尊敬するドガ、マティスとコレクターとしても素晴らしかったアーティストから学んだ。厳しい懐具合なので購入できる作品は限られるが、授業料として考えたら安いものだと思う。私のコレクションは美術館への貸し出しと後世に伝えることにも関われるようになり嬉しく思う。

今の日本のアートに圧倒的に足りないのは笑顔と素直さ。そして造形的性格の基礎基本となるデッサン。アートで社会を良くしていくというヴィジョン。アーティストにとって大事なのは、アートがどうあるべきかで動くのではなく、私はこうしたいと責任をもって表現することである。あーと・わの会からの情報は勇気をもらえる大切な情報となっている。本当にありがたい。

これからも私はアートデザインスクールito、アトリエ桑の木で受験生を中心に指導しつつ、アーティストとしてデッサンを大切にした、緊張感のある新しい表現へとチャレンジしていきたい。

小出三郎（1908–1967）《裸婦》
鉛筆・紙　36×24cm

永津照見（1978–）《Suzanka》
パステル・紙　54×38cm

コレクションと木更津わたくし美術館

木更津わたくし美術館　中村儀介（千葉県木更津市）

コレクションの始まりを考えてみたら、子供の頃、祖母よりもらった天保銭などを机の引き出しに入れて楽しんでいたのを覚えている。又、父が岸田劉生の素描《猫》等を手に入れたのがきっかけになり、又自分自身も絵を描くことが好きだったこともあり、絵画に強く興味をもった。

その後30代の頃、東京駅八重洲のブリヂストン美術館の近くの地下で梅野 隆さん夫妻が古賀春江の水彩展を開催しているところに偶然出くわした。それ以来京橋の美術研究藝林に暇を見つけては通うようになり、梅野さんの熱い口調での話、沢山のもの珍しい絵画は、東京での楽しみであった。

そんなことで、安藤信哉の作品等を４、５年の間に梅野さんより10数点お世話いただくことになった。

その後、しばらくして梅野さんより離れ、高島屋での木村忠太《初夏Ｂ》100号、NYではドナルド・サルタン《ブラックレモン》等に出会うことになった。又、作家では中国人作家丁長林さん、岩崎巴人先生との出会いが印象的であった。

商売は私で４代続いた畳製造業であったが、60歳を迎えた時、時代の流れで和室が減ってきたこともあり、思い切って貸倉庫業に転身し、趣味である私設の美術館をやろうと考えた。先輩の柏わたくし美術館の堀さんを訪ね、ノウハウを色々教えてもらい、大変堀さんにはお世話になり感謝し、今に至っている。

そんなわけで、柏わたくし美術館にならい、木更津わたくし美術館と命名した。

開館前に村上肥出夫、その後に野見山暁治先生や遠藤彰子先生と知り合い、作品と作家いずれにも心を強く動かされた。野見山先生の展覧会は当館で２回も「また会えた」を開催できたことは大変ありがたいと思っている。地元作家の個展、自分のコレクション展等いろいろやって大変なこともあったが、楽しめた。現在は残念ながら、コロナ禍において閉館している。

名のある作家の作品はもちろん良いのだが、中には無名でも力のこもった人の心を動かす作品もあることに気づかされた。

又最近のコンピューター等の普及に対し、相反するとも言える絵画などの文化、芸術がこれからはますます重要になり、必要になっていくのではないかと考える。

PS　絵を楽しむことは生き物の中で唯一、人間にだけ与えられた感性、特権と考えられる。
　　病気にも似たコレクションだが今後も続けていけたらいいなあと思っている。

2022年５月吉日

あーと・わの会 20年に思う

中村 徹（神奈川県川崎市）

20年前、あーと・わの会発足にあたり、柏わたくし美術館の堀 良慶館長からいただいた、わの会へのお誘いの手紙（創立予定メンバーとして、梅野 隆、岩本 昭、桜井佐七、野原 宏、松尾陽作、堀 良慶、平園賢一、大竹永明、寺嶋哲生、猪羽恵一さんの記載あり）等、あーと・わの会の資料を、このたび、東京文化財研究所に搬入しました。これは、笹木繁男さんをはじめ諸先輩から、美術資料の重要性を気づかせていただいたこと、そして何より、資料を遺すことが、会の屋台骨を長年支え続けられた堀副理事長への感謝の印と考えたからです。

「堀さんに絵を持たれたら、その絵は幸せだよ」と、神保町のある画商の言葉ですが、絵を愛し、絵や彫刻を楽しむことを私に気付かせてくれたのは、梅野 隆さん、岩本 昭さん、そして堀 良慶さんです。

美術を仕事とした父親の跡を継がず、私が別の道に進んだのは、美術は辛気臭いもの、脂汗を垂らすもの、という父親から受けた印象と、そして家に積み上げられた案内状等の資料の山に、子どもの頃から辟易としていたからです。しかし、30年前に知った、世にコレクターと言われる方々は、目をランランと輝かせて絵を求め、語り、楽しまれるのでした。このような美術、絵の楽しみ方であれば、私も、と入会したのが、梅野 隆主宰の美術研究藝林の会（引き続き、梅野記念絵画館友の会）であり、あーと・わの会でした。

こうして始まった美術との関わりは、私に2016年銀座のギャラリーゴトウ「中村徹コレクション展 / 中村傳三郎生誕100年記念小品展」の開催につながり、『中村傳三郎美術評論集成』の刊行にも至りました。また、アマン＝ジャンから山口長男水彩作品、伊勢型紙まで、自分の眼にかなった作品を、彫刻も含め、多作家少量（山口長男水彩画20点を除く）購入し、瀬木慎一さんとの出会いもありました。

古稀の年齢に達した私は、かつて辟易とした図録や案内状に囲まれ、スリム化しても溢れる作品・資料の多さに、家族から非難を受けながら暮らしています。これからは、購入した作品と父親の描いた油絵（約30点）の行く先を考え、決断、行動する時期となっています。

それにしても、ネット社会をはじめ世の中の変化は大きく、美術もまた大きく変化しています。自らの眼、立ち位置を忘れず、美と美術（アート）について資料に基づき考え、関わり続けたいものです。

エドモン＝フランソワ・アマン＝ジャン
(1858-1936)
《扇持つ女》1930年　43×29cm
写真は筆者

山田彊一《太郎と花子（No.11）》の前で

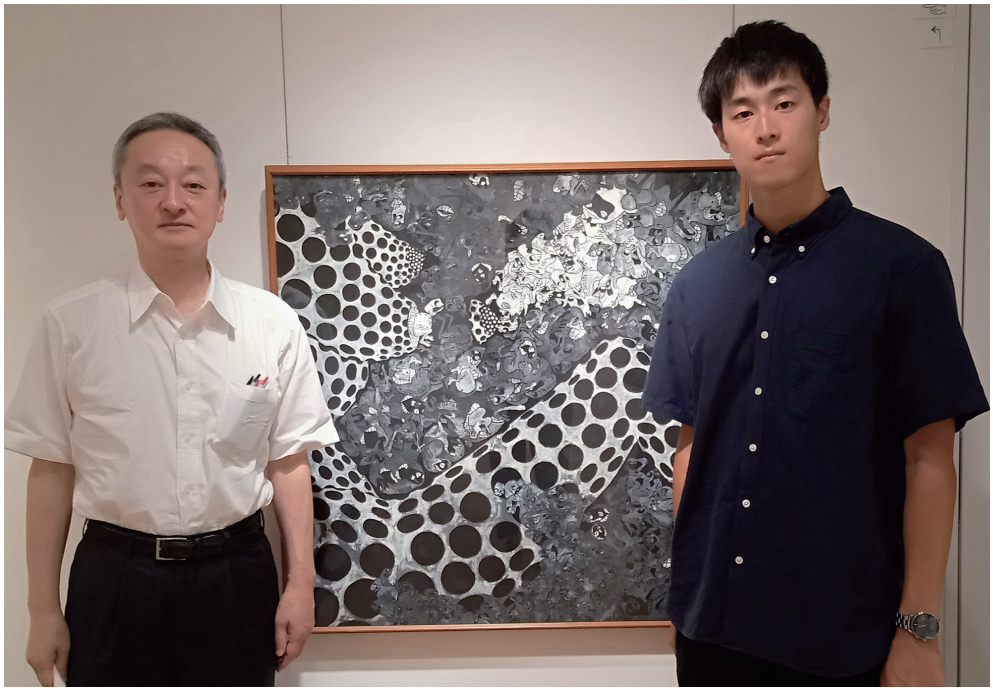
名古屋画廊　中山真一（愛知県名古屋市）

千葉県柏市で 2021 年「コレクターの知られざる名品展」が開催されたおり、私は同市内の大学院にかよう長男をさそう。夕方に柏駅で落ちあいふたりで展示を見たあと久々に食事をというと、返事は「2 時間限定だよ」。

彼が小中学生のころ、夏休みにふたりでヴェネチア・ビエンナーレ見学 2 回をふくむヨーロッパ美術ツアーに 3 度も行ったものである。だが、やがて長男に画廊を継がせることをすっかりあきらめることに。家業のことなどまるで異世界になったようだ。それでも、私を多少なり喜ばせたのは、私が出品した山田彊一《現代餓鬼草子　太郎と花子（No.11）》の前で彼がなにか感じた様子で鑑賞していたことである。

山田先生に私どもで 1950、60 年代作品中心の個展（2014 年）を開いて頂いたおり、山田作品を所蔵する国公立美術館は愛知県美術館だけであった。その当時の「太郎と花子」シリーズの大作は点数にかぎりがある。したがって、できるだけ美術館に収蔵してもらおう。果せるかな国立国際美術館（大阪）をはじめ国公立美術館 5 館に計 7 点収蔵された（他の 4 館は愛知県内）。ところが、どうしたことか他のある収蔵予定美術館では最終的に収蔵せずとの判断にいたる。それならということでその最後の 1 点である本作品を私が所蔵させて頂くこととなった。

山田先生は 2021 年、名古屋市大須においてみずからが発案した「北斎ねこまつり」という楽しい事業に主体的に関わる。しかも絵画コンクールなど多くは自身の持ちだしで開催した。頭が下がるというくらいの話ではすまない。美術界は、ことし 85 歳の山田先生をこれ以上ほうっておくわけにはいかぬはずだ。山田先生の回顧展がしかるべき地元公立美術館でまだおこなわれていないとは、いったいどうしたことか。国（国立国際美術館）のほうがよほど話がわかる、というのでは困る。アートに詳しくなろうとしない長男でも、山田先生にまつわるこの種の理不尽さは、話を聞かせるとさすがによく理解するのであった。



山田彊一（1938-）《現代餓鬼草子　太郎と花子（No.11）》
1967 年　墨・水彩、和紙・紙など　91.1×91.5cm

「あーと・わの会」と私のコレクション

野原 宏（埼玉県久喜市）

私の絵画コレクションの成り立ちを当初から順に見てみると「あーと・わの会」の進展と密接な関係があることがよく解ります。「わの会」の発足前は限られた少ない情報を頼りにJAAオークションなどで好みの作品を細々とみつけておりました。「わの会」の進展とともに私のコレクションも質・量ともに変化してきました。

会の皆様のおかげと改めて心から感謝申し上げます。身近にいる家内からは、あなたのように絵画については全くの素人が錚々たるコレクターの会のお世話をするなんてとても考えられないと今でも言われております。私もその通りと思っています。堀 良慶さんと偶然出会い、思いがけず会を設立するメンバーに選ばれ、堀さんのお人柄と会に対する熱情に感銘を受け仲間に加えていただきました。足手まといでお役には立たずにむしろ迷惑をおかけすることのほうが多く内心忸怩たる思いもあります。堀さんの絶大なお力と会員の皆様のご支援ご協力なくしては本会の多大な足跡ものこせなかったものと確信しております。

私のコレクションは画家の数で200名余、作品数は数え方にもよりますが400点余になり、画材や技法も多種にわたります。これらの蒐集については「わの会」の寄与するところが大きく、なかでも放談会で会員の皆様からご教示いただいたすべてが大変役立ちました。一枚の絵のめぐりあいから購入先まで仲間うちでしかお聞きできないような微妙な質問やぶしつけな質問にも包み隠さず開示していただき本当に参考になりました。その後の二次会でも絵画の特別集中講義をうけました。お聞きしたことを忘れないように翌日から行動開始で念願の絵にめぐり合い大願成就したことなどその絵を見るたびに思い出します。コレクションの別の見方をすると幸せの象徴こそがコレクションだともいえると思います。心配事や健康に不安を感じているときなどはとても購入する気持ちになれません。そんな時に力を与えてくれるのがこれまたコレクションです。「わの会」の功過も種々あると思いますが、会員の皆様のコレクションの一助になったことは紛れもない事実だと思います。「わの会」は私の平凡な人生に貴重な彩りを添えてくれました。感謝と御礼を申し上げます。

東御市梅野記念絵画館にて梅野館長さんと堀さんご夫妻とご一緒に

コレクターとしての私

橋本昌也（京都府京都市）

今回、エッセーを書くに当たり、「コレクターとしての私」について改めて考えてみました。子供の頃から身の回りには道具類が沢山あり、慣れ親しんだ物でした。また、父親に連れられて古道具店や骨董市へ行くことも多く、子供心に古道具や骨董品に関心があったように思います。

その後古道具や骨董品に関わる事も無かったのですが、26 歳の時に祖父が残した陶磁器や日本画を調べる中で、美術館・骨董市・百貨店の美術コーナーなどを巡るようになり、「コレクター」と呼ばれる人たちの存在を知りました。生来の凝り性も手伝ってかチャリティー美術展や関西の有名窯元を訪れたりしているうちに、美術工芸品を集めるという喜びを知るようになりました。その後骨董市やリサイクルショップへと購入先を広げ、2002 年からはヤフーオークションの利用により飛躍的に作品との巡り合いと購入機会が増えたと言えます。産地や各陶芸家団体の作家物の小品を集め、次第に特定作家の作品収集へと移り、小品からお茶碗・花入・壺などへ、そして制作時期別に集めて作風の変化を楽しむようになりました。この間、予算上手の届かない物も多くありましたが、その中で思いがけず掘り出し物を見つけるなど、自分なりの楽しみ方を見いだす事が出来たように思います。

現在所有している作品を、地域別に図録を作る一方、ご縁があって多くを収集した作家については「七代大塩正人・八代正義」、「紅葩舎 河井寛次郎・博次・創太」という形で作っています。これらの図録を作るに当たって一つ一つ写真を撮りながら購入した時の事を思い出したり、購入価格などを見て「よく買えたなー」と振り返ると作業は遅々として進まないのですが、これもコレクターの至福の時間なのです。

これからもコツコツと作品を集め、10 年後の自分を驚かし「よく買えたなー」と唸らせたいものです。

初めて購入した作家物の作品　清水悠三（1935-）《楓印葉酒呑》1989 年　直径 6.9cm、高さ 3.8cm
（於 1990 年 1 月京都陶磁器会館）
河合卯之助、楠部弥一に師事。日展・京展を舞台に活動

それは１枚の絵の出会いから始まった

平園賢一（神奈川県平塚市）

それは１枚の絵の出会いから始まった。その絵とは作者不詳の老人が髑髏に手を組んで瞑想している大正期の細密画だった。非売品ではあったが３年間の交渉の末に入手し、作者探しの旅が始まった。何人もの専門家や高名な学芸員に手紙を出し、ときには会いに行った。皆さん丁寧に対応して下さりいっしょに作者探しを手伝ってくれたのには驚いた。そんな最中に衝撃的な出会いがあった。1997 年６月の梅野 隆さん（当時、東京・京橋で美術研究藝林開設、後の東御市梅野記念絵画館初代館長）との出会いだった。老人と髑髏の絵について尋ねて行った初対面の私を旧友のようにもてなしてくれ、すでに日本洋画史の柱はできているが、これからは壁の部分を私たち市民コレクターが埋めていかねばならない。すなわち今までの日本洋画史は慟哭の歴史であり、力ある作家が忘却され埋没しているのが現状である。それを発掘顕彰し再評価させる大乗的蒐集がいかに重要かを分かり易く熱弁してくれた。それには身銭を切って審美眼を磨くしかないという。著書も贈呈して下さり私の蒐集スタイルが決まった瞬間であった。私のコレクションには一般受けする流行作家のたぐいやすでに評価の定まった高名高額な作品が少ないのはそのせいである。それでもこの 25 年間で 100 を超える絵画や彫刻が公立美術館での展示、寄託、寄贈が叶った。また同好の志の集まりである「あーと・わの会」で多くの会員の皆様と親睦を深め、埋没作家の発掘顕彰のネットワークを展開することもできた。

1999 年の開業以来、アートセラピーの一環として待合室には 30 を超える絵画、彫刻を常設展示し患者さんの心身の健康づくりに役立っている。ときおり大学や市からも講演依頼があり、芸術作品が健康におよぼす影響力は小さくないと思っている。

2017 年には文化芸術基本法が改正され、市民コレクターの自主性に基づく芸術啓蒙が注目されている。芸術は社会を平和の方向に導き、人を健康にする力をもっているのは歴史の証明するところである。

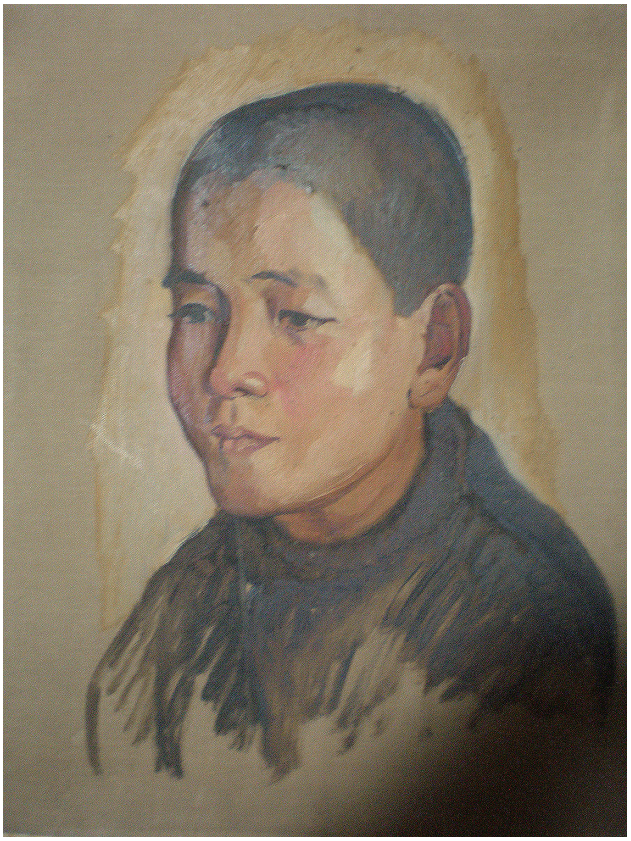
最後に私の好きな芸術論で挨拶を閉めたいと思う。芸術とは「見えるもの」を通して、より高い「見えないもの」へと人間を引き上げてくれる…「蒐集亦芸術」。

清水敦次郎《老人と髑髏》1919 年　油彩・キャンバス　30P

当会在籍 20 年・幻の洋画家作品の受託

福井 豊（東京都荒川区）

絵画購入最初の作品は 1975 年、栗原忠二の油彩ヴェニス、団子坂の森洋画店であった。1991 年、静岡県立美術館「栗原忠二展」に 10 点を出品、資料提供もしたがそれ以前から、いのは画廊にはお世話になっていた。2003 年、いのは画廊から「コレクターが創る！『わたくし美術館の会』」という会が近く設立されるが私も会員にならないかと声掛けがあった。私は前に尾崎正教氏「わたくし美術館の会」の会員だったが頒布会には興味が持てず主に物故洋画を扱う画廊、骨董市や入札で入手していた。当時は 4 年前に早期退職し会社員生活から離れ美術骨董の資料収集に没頭、神保町辺りを彷徨していた頃である。同年 5 月、設立総会が開催され、その集合写真は会誌第 1 号にあるが私の姿はない。私は当初会員だが発起人でなく出席者が本の著者、美術館オーナー、有名コレクターの大御所で恐れ多く遠慮し様子見をした。会誌も同年第 2 号から投稿した。2004 年 3 月、いのは画廊で開催された第 1 回放談会は猪羽恵一氏が見つけてくれた三井良太郎（1890-1937）の油彩小品パリ風景を持参した。同年 8 月、柏わたくし美術館で開催の第 1 回「わの会」コレクション展に三井の油彩仏郊外風景 2 点を出品、これは森洋画店と美術研究藝林で入手したもの。同年、年譜『満州の洋画家･三井良太郎』を纏めた。既述の第 1 回放談会持参の三井の小品は 2012 年初版『わの会の眼』掲載、後に当会 HP にアップされ、これを見た画家の姪から事務局に連絡があり私が出向きお会いして未完の油彩、兄の《少年像（画家の甥）》（1936 年 F8 号・図）を寄託され 2016 年 10 月、京橋区民館での第 47 回放談会に持参報告した。月日は流れ故人となられた会員、入退会で顔ぶれは変動したが多様な美術愛好者が交流できる稀有な場を創設、20 年維持継続された堀良慶氏のご努力ご苦労は有難く改めて深く感謝申し上げる。



三井良太郎（1890–1937）《少年像（画家の甥）》1936 年（未完） 油彩・キャンバス　45.5×38.0cm

花うつぎ蒐めて嬉し絵空事　まんぷく

福田豊万（千葉県市川市）

私が柏わたくし美術館を初めて訪ねたのはもう 15 年ほど前になりますか？　どこかの画廊で柏わたくし美術館のパンフレットを見てコレクションに山本 弘の名前を見つけたからだと思います。というのも、その２～３年前にたまたま初めて見た山本 弘の作品《鬼》を脂汗を流して衝動的に 24 回払いのローンを組んで買っていたからでした。私は千葉の市川市に住んでいるのですが同じ千葉の柏市にある柏わたくし美術館へ１時間半程もかかり伺ったのです。その時初めてわたくし美術館へ行ったのですが、堀さんがどの様な説明をされたのか？　山本 弘の絵を見る事が出来たのか？　憶えていないのですが、３階までのほとんどの部屋（一部プライベートな部屋あり）や居間、食堂、トイレにまで私の知らない作家の絵が所狭しと飾られていて圧倒されたのは鮮明に思い出す事が出来るのです。そこであーと･わの会の存在を知り、翌年ギャラリー KANI での「わの会」コレクション展を見に行き、会員の皆様もすごいコレクターが集まっているのを知ったのです。私は主に版画とアールブリュット系の作品、若い作家の小品を少し持っているのですが、こういう場で山本 弘の作品を大勢の方々に見て頂ければ嬉しいと思い入会させて頂いた次第です。それ以降コレクション展にも参加し、物故作家の事は諸先輩に教わりながら楽しく（あまり熱心ではなく、マイペースで）活動させて頂いています。わの会の総会は毎年、梅雨の頃ですが、最近はコロナの影響で総会も放談会も出来ず寂しい思いをしているのは私だけでは無いと思います。早く元の日常に戻り楽しく放談会をしたいものです。私は会員の方でまだお会いした事の無い方も何名かおられますが今後ともよろしくお願い致します。

最後になりましたが『「あーと・わの会」20 年のあゆみ』作成おめでとうございます。

わの会へ卯の花腐し傘軽し　まんぷく

一身にして二生の実現に感謝！

堀 良慶（千葉県柏市）

一生目：大手化学会社に勤め、研究開発、企画、販売担当、小さな成功・失敗もあった。55 歳の時、早期退職制度に応募退職。

二生目；最初のコレクションは 33 歳、米国ロスからシスコに出張時に買った 6 号大の油彩です。あれから 40 年のコレクター人生。帰国後、趣味として 1,000 点、5,000 万円ほど絵を購入。癒し、心の活性化目的です。サラリーマンでは多い方でも 2,000 万円程度ですので頑張った方だと思います。偽物も掴んでいます。ごく普通の総花的コレクションです。

私は星野桂三さん、梅野 隆さん等の影響を受け、物故中心に作品を購入。その後、野田哲也さん、女流作家中心に現存作家も求めました。退職後、私は絵を選択、尾崎正教さんの『わたくし美術館』全 4 巻を東京都現代美術館の図書室でむさぼり読み、尾崎正教さんに弟子入り、ご指導を受け、2000 年 11 月柏わたくし美術館を開館させました。実は開館前に美術館並みに 6 部屋に 60 点ほど展示して開館は自然でした。開館資金は画集・絵葉書等 200 万円に加え、美術館開館の為の作品購入 1,000 万円です。企画展は 5、6 回 / 年開催、常設展を併設、60 ～ 80 点の展示です。自己実現も出来、人生最高の高揚した 10 数年間でした。開館後 1、2 年するとコレクションだけの企画展では 3 ～ 5 年で一巡することが判明、尾崎正教さん没後、後継者が現れず、閉鎖状態の「わたくし美術館の会」の復活を模索。美術館の延命と同時に草の根美術普及活動に活路を見出したのです。尾崎正教さんのご遺族から名称の使用許諾を得、わたくし美術館にコレクターを加えた「わたくし美術館の会」を野原 宏さん、平園賢一さん等発足準備委員会 7 名と相談しながら 2003 年 5 月に 30 名、4 美術館で発足しています。

時は過ぎ、会は NPO を経て 2022 年 2 月現在、「あーと・わの会」と名を変え、18 年目、会員数 68 名、わたくし美術館 19 館へと成長してきています。発足時より事務局を担当させていただき、上司、仲間に恵まれ、ご指導、ご支援賜りました。心から感謝申し上げます。充実した二生目です。

私に美神が微笑み、夢が叶いました。2020 年 9 月老化が進み熟慮し任期終了後、退任を申請いたしました。

2018 年 4 月 26 日　柏わたくし美術館　野田哲也展　国立イスラエル美術館友の会 36 名が来館

芸術と人生　（花を持つ女・島田章三画伯）

増田一郎（静岡県浜松市）

40 年間続けた酪農経営を廃業して最後に２人きりになったのが、56 歳と 53 歳の老夫婦でした。

「老後は未知の世界」とも言います。苦難を乗り切る度に支えてくれた「芸術と文学」をおいて私の老後を語ることはできません。その都度、蓄えられた絵画を有効に活用できないかを考えた結果、倉庫に眠っている絵のコレクション展を開くことにしました。お陰様で浜松市美術館を始め喫茶店や銀行で私のコレクション展を開催することができました。それは多くの人との出会いの始まりとなり、名古屋画廊のお力添えで笠井誠一画伯の講演会を浜松市美術館で開きました。

ある喫茶店でのコレクション展の最終日の午後、１人のドット模様のワンピース姿の方が「この絵って表紙絵に良いわね」と呟いていました。「その絵は野見山暁治画伯のデッサンです」。名刺を頂くと、芥川賞受賞作家の吉田知子氏でした。私は勇気を出して手作りの『花蕾』を見せると、さらっと文藝冊子をめくり、私の方へゆっくり近づき、

「あなた文章書けるの？ うちの『遠州同人会』へ入らない？」

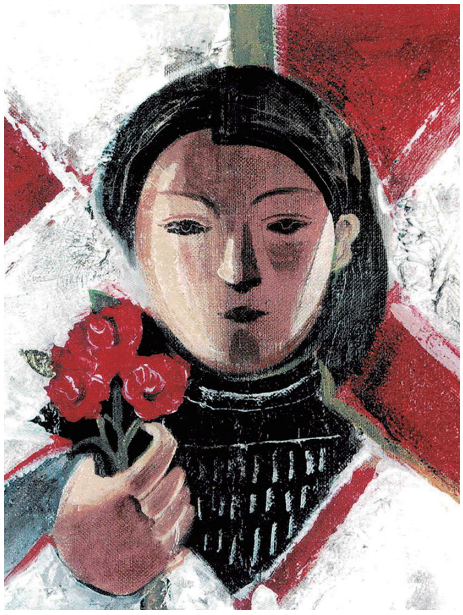
この出会いが切っ掛けで創作小説の部門で浜松市長賞を３回受け、文藝同人誌を立ち上げて「編集・発行人」になって 31 年になりました。まさに人生は邂逅そのものです。

2000 年の秋頃『月刊美術』に島田章三画伯と織田広喜画伯の２人展の記事を見て、私は文芸誌の表紙絵を求めて名古屋へ走りました。W画廊に着き心躍る思いで入ってゆくと、あの島田画伯は巨体をソファーに横たえ、奥様と共に私を迎えてくれました。そして作品の前に行き語り始めました。

「作品を描き終わって見たとき、自分の描いた絵と自分自身の間が埋まっていないことは私の場合まったくないね。それは表現で非常に面白いのは、色、形、線。これはどんなことをしても自分のものが出てしまいます。作家の情念が入った絵は、何度見ても飽きません。駄目な絵を何十点持つよりも、良い絵を１点持つ方が何時までも喜ばせてくれます」

画伯の言葉は私の眠った心を呼び覚ましてくれました。

（左）島田章三画伯　1933 年生まれ
（右）増田一郎　　1936 年生まれ



島田章三《花を持つ女》
2000 年　油彩　４号

「あーと・わの会」に入会して

丸山 登（東京都荒川区）

私が「あーと･わの会」に入れて頂いたのは 15 年程前の東御市の梅野 隆さんの美術館見学（五百住乙人さんの回顧展）のバス旅行に参加したことからでした。

以来毎月送られてくる貴重な美術資料や内容の濃い情報を有り難く､興味深く拝見しております。また会の活動に献身されている堀様はじめ運営に携わる役員の方々には心から感謝しております。同時に会員の皆様の美術に対する深い見識と温かい愛情には毎回尊敬の念を強くしております。

私のささやかな美術活動ですが、自宅近くの尾竹橋通りに面したマンションの出入口に２面の展示ウインドーを借りて手持ちのコレクション（小品が中心です）を２点ずつ月替りで展示してかれこれ５年程になります。これはオーナー様のご理解と厚意で無償の上、防犯カメラから夜間照明まで備わった結構なもので、マンション住人の方や商店街通りを行く愛好の方々にも喜んで頂いております（時々通行の方から問い合わせやお礼を言われて嬉しい思いをしています)。そして４年目辺りからは手持ちコレクションもボツボツ底を尽き、最近は（厚かましくも！）自作を展示させてもらい制作の励みとしているこの頃です。

万事物臭な私がこの様な活動を続けてこれたのも「あーと・わの会」先輩方の情熱的な活動に多大の刺激と影響を受けたからと感謝に堪えません。

なおコレクションから今までに展示した主な作家はおよそ以下の通りです、いずれもサラリーマンの乏しい小遣いの中で時間と足で集めた小品です。

(五百住乙人、井上 護、大沢昌助、大沼映夫、尾崎良二、岡野 博、刑部 人、川口軌外、木内 克、栗原一郎、久保 守、須田 寿、島田章三、島村三七雄、杉本健吉、滝川太郎、原 精一、東郷青児、豊福孝行、荻 太郎、難波田龍起、兵藤和男、日野耕之祐、藤井令太郎、平田達也、前田昌良、松尾 繁、ミズテツオ、宮崎 進、宮崎文子、矢崎虎夫、他作者不詳等多数)

あーと・わの会全員メッセージ

神戸わたくし美術館　三浦 徹（兵庫県神戸市）

アート・コレクションを始めたり、会誌に投稿するようになり、約 20 年以上が経過してしまっている。私の拙文を拝読していただいている皆様には御負担をかけていることは間違いないが、書きたがりの私に免じて御容赦願いたい。ただ会報の作成・送付等に携わっておられる方々の御苦労については、本当に感謝しています。

さて、今回は会員全員へのメッセージであるので、私の近況をお知らせする拙文を記述させていただく。それは私の「陶コレクション」約 200 点が、兵庫陶芸美術館への寄贈が決定し、その展覧会・御案内と称されたパンフレットに掲示されたことを報告させていただく。私は本年 4 月 20 日で 86 歳になる。このリーフレットの一部をコピーし、掲載させてもらいますので御参照下さい。この展の開催については「まだか！　まだか？」と思いつつ、待っていたのだが、館の年間展覧会の案内の中で、明記されたので、大変喜んでいます。この展については、前述もしたが首を長くして待っていました。私はコレクションは「継承難、蒐集易」という熟語を作り、あちこちで披露してきているのも事実で、それが現実になったのですから、現在はその悦びで一杯ですし、コレクションの継承は大変な仕事であるということも認知しました。なお、私の絵画コレクションの内、約 500 点は神戸市在住であった高橋信夫と堀尾貞治の作品です。それ等が公的機関にて収蔵されますので、これ程、嬉しいことはありません。幸せです。なお、記述があと先になりましたが、私が 19 歳の時、「やきもの」の「や…」も分かっていなかった時に、魅せられ入手した故市野省三さんの作品も寄贈でき、66 年ぶりに作品が生まれた丹波に帰ることにもなりました。66 年間に亘り当館に在り、それが今回、兵庫陶芸美術館で生涯を終わることが出来るので、コレクター冥利につきると思っています。私はいつも、どんな小さな事であっても、それを行い続けている人達が多くなればなる程、そうした国の文化度は向上するはずであるという事を信じていますし、それがコレクターの心意気ではないかとも考えています。

受贈記念 平井昭夫コレクション × 三浦徹コレクション　やきものを愉しむ —二人のまなざし—
会場：兵庫陶芸美術館
会期：2022 年 6 月 11 日（土）～8 月 28 日（日）

神戸市在住の平井昭夫氏と三浦徹氏から現代陶芸を中心とする作品を受贈しました。三浦氏は丹波焼と出会い自ら作陶するまでに魅せられました。それぞれの思いで親しみ続けたやきものを一堂にご紹介します。

右上から：山田光《黒陶スクリーン》1984 年／川口淳《色絵近彩楽園文三ッ足の小鉢》1995 ～ 1996 年頃 ／ 三原研《炻器獣頭掛花入》2002 年 ／ 松本ヒデオ《GEO-Ho 9905》1999 年 ／ 申相浩《Dream of Africa》2004 年
※いずれも三浦徹コレクション

絵との出会いが人生のテーマとなって

裾野アートハウス　水口英男（静岡県裾野市）

静岡の田舎者が大学生として上京し都会の生活を始めます。さしたる目標もなく親元を離れることだけでも解放され､その上学生という絶好の身分です｡解放されたバカ者ですから遊びたいしカッコつけたいしで金がいる。公務員の親にはそれほどの所得があるわけでなし、セッセと働いているので無心する訳にいかず、勉強は二の次三の次で当然アルバイトに精を出す。そんな訳で成績は悪いし卒業できるかわからない。就職活動もしていない。その時のバイトは昼は現代版画センター、夜は銀座のサロンでキャバレーよりちょっと高級なところ｡地下鉄銀座駅から８丁目の店まで日動･ためなが・吉井など歩いているだけで絵が目に入ってくる。タダで教科書にのる印象派とかピカソの絵が見れ東京は凄いところだと感じた。ためながはあまりに高級そうで受付の女性も超美人、小汚い若僧ですからさすがに場違いな所へ来てしまったとそそくさと引き上げたことを思い出す。子供の頃から勉強はダメでも絵を描くことは好きだったのでウインドウの絵が気になった。卒業したら何しようか何が出来るかと悩んでもいた。取り敢えずはそのまま現代版画センターに居残る。門前の小僧経を読むごとく絵の事情も分かってくる。いい作家なのになかなか売れない。いい作品を作ろうと懸命になっている作家もいる。描く人は沢山いるが買う人は少ない。これでは画家の生活は厳しい。好きな絵を描いているから仕方ないのかとも思うが、それでもいい作家には存分にいい仕事をしてもらいたい。絵を買う人を増やさなければ世の中良くならない。美術界にお金が回り画家の生活も良くなる。絵は心を豊かにし人生を豊かにする。私のやることはこれだ。現代版画センターを離れ、いい絵を売ろうと理想に燃えたが、現実は厳しくとても食べても行けず日雇いのアルバイトで食いつないでいた。このままではまずいと実家に帰り暫くして、小さな電気部品の工場に就職。慣れぬ機械相手でした。３年もすると人間相手の絵に未練がつのり、住まいと兼用の展示スペースを作りました。会社は定年まで勤め、ギャラリーと二足の草鞋でした。忙しく欲張りながら絵と出会いで心豊かな人生です。

2022 年２月　沼津信用金庫本店ストリートギャラリー　難波田龍起展　水口コレクションによる企画展

エコール・ド・パリの画家、板倉 鼎を顕彰する

あーと・わの会顧問　水谷嘉弘（千葉県松戸市）

子供の頃から絵が好きで中学生の時には絵を観て画家を当てる美術の授業が楽しみだった。その熱が高じて上野に進学したが、ダブルスクールの末もう一つの望みであった international business の方を選んだ。バンカーとしてロンドン、ニューヨーク、東京、香港、シンガポールの世界五大金融マーケットを経験出来たのは幸せだった。特に 5 年半いたニューヨークでは MoMA や The Met を余暇だけでなくアテンド仕事でも満喫した。

40 年のビジネスキャリアをフルリタイアしてかつて一度は志した美術の世界に戻ろうとした時、出会ったのが夭折したエコール･ド･パリの画家、板倉 鼎だった。目黒区美術館の回顧展（2017 年）を観てこんな質の高い絵を描く画家がいたのか、と驚いた。鼎が私の住む松戸出身と知って顕彰活動をしようと思い立つ。「一般社団法人 板倉鼎・須美子の画業を伝える会」を設立した。「フジタとイタクラ展」（2019 年、聖徳大学博物館）では後援団体となって、藤田嗣治と板倉 鼎の親族を引き合わせたり、NHK「ラジオ深夜便」に取り上げてもらったりした。この展覧会はパリを中心にフランスで行われた日仏友好 160 周年記念行事「ジャポニスム 2018」の 1 イベント「藤田嗣治展」に会期を合わせて企画されたため、友人の木寺昌人駐フランス日本国大使（当時）からメッセージを送ってもらった。

そして、板倉 鼎が私を「あーと・わの会」に導いてくれたのである。秀作《黒いショールの女》の所蔵者野原 宏さん、旧蔵者堀 良慶さんと面識を得たのだ。堀さんのご案内で野原さん宅の作品を拝見することが出来た。そのご縁で当会に顧問として参加することになり、会誌やホームページに寄稿する機会を与えて頂いた。忘れられつつある近代日本洋画の躍動期、1920 年代、30 年代の画家や作品の復活と再評価を願って活動を続けて行きたいと思っている。

板倉 鼎《黒いショールの女》を囲んで　2020 年 10 月

あーと・わの会 20 周年記念誌によせて

山瀬一洋（福岡県糟屋郡）

早いものでわたくし美術館の会から 20 年おめでとうございます。私もコレクターの端くれとして、当時画廊さんの紹介もあり入会を打診、心よく御承認頂き現在にいたっています。宜しければ皆様に、私の歩みの思い出綴りをご覧頂きながら御笑読下されば幸いです。

先々では個人美術館でもと思いながら、先ずは地元の公設ホールや図書館の展示ホールを借り受けて個人コレクションの展覧会を催しました。絵は多い所で 70 枚前後少ない所で 15 ～ 16 枚、手伝ってくださる方もいましたが基本は私 1 人で、車の手配・搬入搬出・飾り付け・新聞社への投稿等を行いそれなりの疲労感もありましたが、短い期間中の来場者数は（入場料無料）1,000 人を優に超え感謝と共にこれからの自信につながりました。

次に展覧会来訪者芳名帳と画廊さんからの紹介、地元誌への投稿等からの参加者を募って地元（ちなみに私は九州福岡が地元です）の美術愛好会立ち上げを企画し、1 ～ 2 ヵ月に 1 度の集まりに平均 7 ～ 10 人前後、会誌の発行、年に 1 度の展覧会を催す事を約束した美術愛好会が立ち上がりました。会員は教職員・大学教授・公務員・サラリーマン・経営者・画家・新聞記者・正体不明者等カラフルな愛好会が出来ました。展覧会も福岡県立美術館・福岡アジア美術館・門司港レトロ美術館等で開催させて頂き、教育委員会・市観光課の後援もあり公設場所へのポスター掲示等助かりました。埋もれた画家の作品を遺族の方々と共に地域の公私立美術館に寄贈・寄託をお手伝いする仕事や、会員個々の御自宅訪問コレクション見学、茶話会等この頃の集まりも酒が入るといつ帰れるのか心配するほど盛況でした。話はとんとん拍子に先に進んで、この頃からコレクションの地方区から全国区も収集する方向への切り替え、個人美術館と経済の悩み、この事は堀事務局長の「健全なる赤字経営」に得心、私自身の仕事における新規事業立ち上げ等の事情もあり代表を交代して新世界へ転進する事としました。

それからの時間経過もあり現在は新規事業も立ち上がり年齢も古希を迎えコレクションは総花的であり、個人美術館の用地もあれこれと迷いながらも探している状況の中、以前は自分自身のために自宅で 100 点ほど飾って見ていた頃もありますが、私の個人美術館、行き着く先はまだまだ霧の中におぼろげに有るような無いような自力他力の中をゆらゆらと歩んでいるようです。

台湾　故宮博物院にて

コレクション

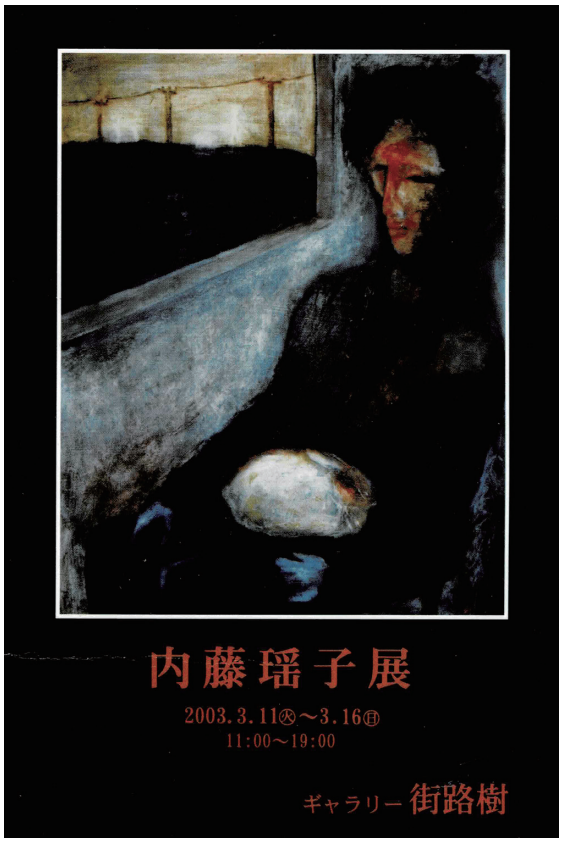
山根康壮（千葉県柏市）

初めてのコレクションは戦後間もない小学校に入学した頃です。焼夷弾による焼け跡がかなり残っていました。がれきの中に色んなビンが溶けて重なり割れて茶、青、緑、黄、白に輝く宝石のようでした。中学校になるとハチ（昆虫採集）、植物は羊歯類で根がついたまま押し絵にしました。高校では柔道に熱中そして浪人生活、受験のための勉強が嫌になり近所にある美術研究所へ、そこで裸婦の美しさに圧倒されました。ロダンの言葉、岸田劉生の美の本体、ダ・ヴィンチの素描論、コロー、セザンヌ、ドラクロワ、プッサン、ベラスケス、ゴヤ、ティントレット、ティツィアーノ、ジャコメッティ、宗達、北斎、展覧会通いを続けました。好きな絵１点をあげなさいと言われたらセザンヌの《青い花瓶》です。1978 年ごろ新宿美術研究所へ、麻生三郎、山口長男の指導を受ける。カタチはプラス（凸）とマイナス（凹）の形態から成る。カタチとは空間と実体のバランス。カタチとは、それぞれの物で構成された空間を描くこと。

1998 年ごろ車に轢かれ平らにされたスチール缶に興味を持ち拾い集める、数千枚になる。そこに油彩で犬、猫、女性、風景など描く。

2003 年逗子の友人から内藤瑤子展の案内状が届く。生、死、病、不安、暴力、恐れ、怒り、悲しみ、痛みが魂の自己開示となり解放と生のエネルギーに満ちていました。以降 2012 年まで個展ごとに購入する。

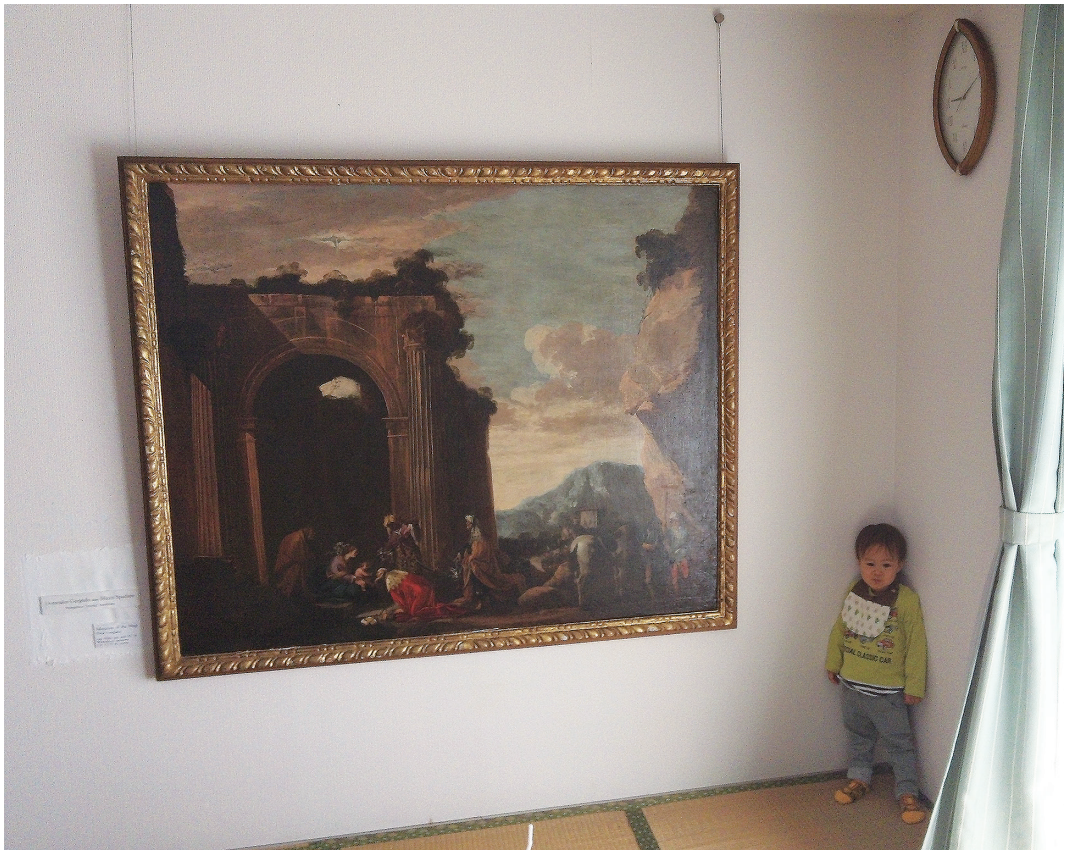
2013 年８月仕事中に落下事故、仕事も収入も失いコレクションもやめました。しかし絵にかかわる時間は多くなり、少しでも前に進み新しい発見の喜びを感じたいと歩き続けています。



会員の皆様の博識　執行部の寛容

横山俊樹（神奈川県横浜市）

歴代役員の方々の組織運営にかけられた 20 年の労苦に、畏敬の念を新たにします。日本の近現代美術について総会・放談会・会誌を通じ、目から鱗の機会を、会員の皆様から常に与えていただきました。私のコレクションは異質ですが、執行部の方々も快く受け入れてくださり、これも大変感謝しています。会誌 73 号、74 号で書かせていただいた、この画家ガルジューロの別シーンの素描を最近入手しました。放談会で皆様の感想がききたいです。私、この画家本邦初紹介とうたっていますが。実は 2010 年 6 月から 9 月まで国立西洋美術館で開催された「カポディモンテ美術館展」で、すでに彼の素描 1 点が解説文付きで、展示されていたことがわかりました。訂正いたします。



ドメニコ・ガルジューロ（1609-1675）《マギの礼拝》1630 年代前半　油彩・キャンバス　127×157cm
カラヴァッジォの権威　フェルディナンド・ボローニャの鑑定書付

今までの生活を振り返って

和田孝明・幸子（埼玉県川越市）

私は、小学校教員の時、10年間毎週1回油絵を習った。お世話になったF先生は、元中学校美術科教員で、後に新構造社の理事長となった。いつも終わりに「みましょうか」とつぶやき、描いた絵の指導を受けたりして、油絵の基礎基本を学んだ。また、展覧会や仲間との交流もあり、とても新鮮で楽しかった。

この頃、古い焼き物に興味をもち六古窯の壺を中心に蒐集を始めていった。壺は窯元や焼成条件により、顔の景色が異なるのも魅力であった。好きな古備前船徳利（ふなどっくり）は、指の指紋が残っており、時代を共有したような気持ちになった。蛸唐草、みじん唐草、李朝壺、あげればきりがない。陶芸館や博物館では、焼き物の歴史やその奥深さを知った。日常慌ただしい中、焼き物のある空間で、ゆとりのある時間を過ごすことができた。

時がたち退職を迎え、記念に川越の洋画家、岩﨑勝平の《ひじつく》を購入したのが絵画蒐集の始まりであった。二人は、好みが異なる所もあるが折り合い、作品は増えていった。近くの川越市立美術館には、何回か作品を展示して頂いた。それが縁で学芸員と関わりがもて、美術館内外の仕事や取り組みを知ることができた。K画廊やA氏からも資料やタイムリーなアドバイスをいただき、視野を広げることができた。

しばらくして、あーと・わの会の会員となった。いろいろなジャンルや多くの作家を知り、たくさんの作品に出会った。多種多様な会員の話を伺ってみると、なるほどなと納得できることが多くあった。また、担当者のおかげで放談会や展覧会等に参加でき、満たされた気持ちになった。さらに会員の方々からの情報により、初めてのことも多く学んだ。地方の会員美術館を訪れ交流できたことが、とても楽しかった。

今までの生活を振り返って、今後も二人が望んでいることは、①国内外の美術館等をめぐり、好きな作品をみたり、みつけだしたりする。②多くの人と美術的な話をして、生活を豊かにする。③何らかの社会貢献をすることを通して、身のまわりにアートがあり潤いのある人生を送りたい。

あーと・わの会 展覧会にて

草藪に潜む鬼の如きコレクターの話

コノキ・ミクオ（千葉県匝瑳市）

酒飲みの子だから、この子は頭が悪いといつも母に言われていた。勉強は嫌いで絵ばかり描いていた。中学生になると、図工の時間には静物画といって、机の上に置かれた果物や壺に入った花などを描かされた。或る時、リンゴ二つと貧乏徳利を水彩で描くことになった。その徳利をじっと見ていると、頭が小さくて胴体はずんぐりして太い。僕に似ていると思った。何日か経つとリンゴは色が変わり食欲は無くなったが、貧乏徳利には段々愛着が湧いてきた。この徳利に魅かれるのは「のんべえ」の父の所為かもしれないと考えたり、なぜ貧乏徳利と言う名前なのか、この徳利は酒屋にもっていって酒を入れてくる物なのに、どうして貧乏の名が付いたんだろう、酒を買いすぎて貧乏になった為か。時代劇でも浪人が片手で徳利を翳して酒を飲むシーンがあるが、この徳利だ。父は大酒飲みだが父の時代では一升瓶と茶碗で用が足せたのだから、この徳利は江戸時代までの物かなあ、なんて興味をもっていたら、友人が私に貧乏徳利を一本くれた。

その後、酒屋の裏庭で転がっていた三本を貰って、四本のコレクションができた。瀬戸の灰色掛かった素朴で可愛いものだ。それから、薬瓶や郵便切手、古本など集めだしたがすべてが頂き物で、「ちょうだい！」専門だった。蒐集癖とは、三つ集まるとまた一つ、二つと欲しくなり、沢山あると満足するのだ。いわゆる欲望だ。その欲が意欲となって日常の生活にも元気力がでるのだ。そして金の掛かるコレクションともなるとその為の資金を捻出するために仕事に精を出して頑張ることになる。だから、自分を怠け者だと思う人こそ何でもいいからコレクションをすべきだ。だがコレクターは自分の蒐集品に惚れてしまうとそれしか見えなくなってしまう傾向がある。それは自分を客観視できなくなることで、だから他人のものを心にもなく互いに褒め合ったりもする。危険なことだ。

美術学校に通うころ、私は学生と商売の二足の草鞋を履いていたので、更に蒐集癖は重病になっていた。学校の帰りに骨董屋を覗いたり、仕事の合間を見つけて画廊を巡り、借金で絵を買ってしまったり、それでも満足だった。だが、美術商で見つけた茶道具なんかは高価なので大借金だ。やっと払い終わったころに又素晴らしい女、否、茶碗が赤いべべ着て座っている。また借金だ。昔、尊敬する梅野隆さんが言っていた。「コレクターはいつも地獄を抱えている。何度も蟻地獄に落ち、這い上がってはまた地獄にずり落ちる。落ちながら齢を重ねて来てしまった」と。確かだ。或る時、梅野さんと食事に行ったら「割り勘で、千円以上の物は喰わん。コレクションは十万円以上の金は出さないことに決めている」と言うのだ。さぞや地獄の責め苦にあっての悟りなのだろう。自分のコレクションの限度額を決めておかねばやってられないのだ。私なんか貧乏徳利頭なので、旨いものは喰いたいし、いい車に乗りたいし、いい女にも会いたいし、恋もしたい。美しいものは須らく我が物にしたいという欲望の権化みたいな者だから、蒐集をするために狡賢くケチケチと抜け目なく、専門の商人軍団と戦わざるを得ないのだ。商人に勝つためには一にも二にも良い実物を見て触って学ぶしかない。「蒐集」の文字には草藪の中に鬼が潜んでいる修羅場が見える。それにしても、あれやこれや欲しいものだらけで地獄と極楽を行ったり来たり。愈々、的を絞って蒐集しなければだめだと思い至った。

中学時代の絵の恩師が亡くなり、師のアトリエを片付けた時、二十五号の油絵が出てきた。

奥様は「此木君、松本竣介さんの絵、好きでしょう。あげるから持って行きな」と言う。恩師は松本竣介と同郷の岩手県出身で、一緒に絵を描いていた時があったようだ。

桐生の大川美術館を訪ね、その絵を大川栄二さんに見てもらった。すると大川さんは眼鏡を外し、

ふむふむと言ったと思ったら、「何処で手に入れたか、どうしてこれを松本竣介だと思ったか」と質問を挟みながら、昔は面白かったよとか、桐生はどこどこの料理が旨いとか、延々と遠巻きの話が続く。と、突然「この絵は置いていけ！」と言い出したが、私が黙っていると、自分が絵を集めだした頃の話や、此木君の絵は二点持っているよ、美術館なんか金にならんとか、其れからも大川節はなかなか止まらない。猫の前に魚を差し出してしまったようで、今すぐにでも咥えて食べたい様子だ。桐生の山の中で追い剥ぎでもあるまい、延々と五時間粘られた。私は腹は減るし頭はガンガンと痛むが、粘り勝ちか、逃げるが勝ちか。さらに「皇太子殿下が美智子妃殿下が」と、話題は尽きない。やがて「どうだ、俺が持てば価値が出るんだ、三十万で置いていけ！」背の高い人は声も大きい。その時、奥から女性が「お薬の時間ですよ」と、入って来られた。シメタ、今こそ逃げるチャンスだと椅子から立ち上がり、「いやどうも長居を致しました、ご指導下さり有難うございました。また面白い絵を持って上がります。さようなら。」深々とお辞儀をしながら私はすかさず両手で絵を抱えた。コレクターは社会的地位もクソもない。ほしいものを見ると草藪の鬼となるのだから。

フランスの画商ヴォラールは、ボナールを世に出した人だが、「画家はコレクションをしてはいけない」と指導したので、ボナールは自らの作品に美を求め、制作に没頭したという。また、反対にピカソは他の所に美を見つけ、無名の天才の美を掘り起こした。レンブラントはコレクションで借金地獄を味わった人だ。

私は美術大学を出てすぐにローマに留学したが、ローマでも蒐集癖を発揮した。学校をサボっては骨董市（ドロボウ市）に通ったものだ。其処で夜はドロボウ稼業で昼は骨董屋だという男と知り合いになり、数点の絵を買った。彼が懸命に勧める絵があって、見るとオランダの古い西洋漆の額に入った絵で、ローズウッドの厚い板に油で人物が描かれている。農民画家ブリューゲル派の小品のようだ。この絵はどうしたのかと訊くと身振り手振りでドロボウからドロボウした、「イタダイタのだ」と言うのだ。私の心に潜む草藪の鬼が頭をもたげ、修羅の道をくねり始めた。「よし、この絵を何とかしてものにしよう」と画策する。「安くないと買わないよ、もう金が無いんだから」「〇〇リラにするよ」「イヤ、それじゃ高いよ、だめだ」「じゃあ、〇〇リラでどうだ」「いや、だめだ、来週日本から美女が来るんだ、いい女だぞ、紹介するからどうだ」と、嘘八百を並べる。「女も欲しいし、金も欲しいから売っちゃうよ、ＯＫだ」シメシメとうとうセシメタ。彼は新聞紙で包んだその絵を、「コノヤロー・モッテケ・ドロボウ！」と私に放り投げた。どこで聞き覚えたのか、これには参った。その後もこのドロボウさんから何点もドロボウ価格で手に入れた作品は、今、我が家のサロンの壁に恭しく掛けられて多くの心を癒している。

私のコレクションは貧乏徳利から始まったが、その徳利は七本程集めただけでやめた。親しい友人が二束三文の伊万里の皿や、画家がパンの為に描いた売り絵ばかり並べて悦に入っているので、「こんなゴミまで集めだしちゃ私の友人かと思うと恥ずかしいよ。貧乏にならないように貧乏徳利でも集めろよ」と勧めたところ、相性が良かったのか、ブレーキが利かない独身者だからか、彼は数年かけて千本以上集めてしまった。すると全国の市場では貧乏徳利が無くなり、やたら高価になってしまった。

コレクターは、買う事が楽しくて堪らない。蒐集癖にブレーキを掛けるのは女房の小言だが、その特効薬を飲んだふりをして、隠れて買って来た物を女房に見つからぬよう梱包されたまま仕舞い込んで一度も開けたこともない、ましてや壁に掛けたことなどないという絵画や骨董品が一室を占領して困っているというケースは、結構多いのだ。森で集めたドングリを土に埋めて忘れてしまうリスのようだ。

虎は死んで皮を残すと言うが、実は人間にも皮を残すのがいる。大正、昭和初期までは日本でも鼈甲色に変色した皮に黒墨や緑、赤などで描かれた美しい入れ墨アートが高額で売買されたそうだ。私もローマに居た時、フランスの青年が、食えなくなった時にタトゥを入れてその皮膚を剥がして

売ったのだと、尻を見せられたことがあった。片方の尻は無事だったがもう片方は切り取った跡が四角く凹んで萎んでいた。タトゥを入れる代金の何十倍かで売れたと言う。だから彼は「両腕と両腿、片方の尻と背中があるからまだまだいける。背中だったら新車一台分はチョロいもんさ、命懸けだけどね」と笑った。

この筋のコレクターはまだかまだかと待っているという。コレクションは実に人さまざまだ。

いやいや考えてみると、コレクションは人間だけの習性ではないらしい。カラスは光るものを集め、ムクドリや蟻は虫を集める。獺（カワウソ）は魚を集め、それを広げならべている様は祭りさながらだという。正岡子規は自らを獺祭（だっさい）書屋主人と号して、机の上は本や原稿用紙を散らばしていた。川端龍子は獺が獲った魚を並べている様を絵にしている。蒐集癖はなるほど動物にもあるようだ。だが、こんな寒い正月には物を集めるよりは、好きな美術品でも愛でながら、銘酒「獺祭」など飲んでいた方がずいぶん幸せだろうと思っている。

〔本稿は、雑誌『ギャラリー』での連載「コノキ・ミクオの本当のような嘘のような呟き」第１回として2022 年１月号に掲載〕

「此木三紅大のガンダ彫刻展」みゆき画廊（東京都中央区） 2006 年９月　此木さんを囲んで
後列左から此木紀子さん、みゆき画廊関係者、堀 良慶さん
前列左から此木三紅大さん、梅野 隆さん、海上雅臣さん（美術評論家）、
野原 宏さん、中村文俊さん、阿部真也さん

わたくし美術館ことはじめ

元自由が丘画廊主、あーと・わの会応援団　実川暢宏（東京都渋谷区）

1970 年代のことですが、尾崎正教さんと私は美術館について話をしました。

当時、国内には美術館はそれほど多くありませんでした。公立美術館は団体展のための会場として使用されていました。

魅力ある展覧会の多くはデパートの美術会場が使われていて、割合と高い入場料が必要でした。

そんな時期に、尾崎さんは若い作家の作品を多く収集しており作品群の処在に苦労し、千葉の方に倉庫を建てると決めている事を話しました。その時、私が「その倉庫をいっそ美術館にしたら？」と「えっ」と聞き返してきた瞬間に「それ、わたくし美術館と名乗れば！」と返事しました。彼はすごく喜んで「これからその名称を使わせてくれ」と云われ、それ以来『わたくし美術館』全４巻の本を出版した訳です。

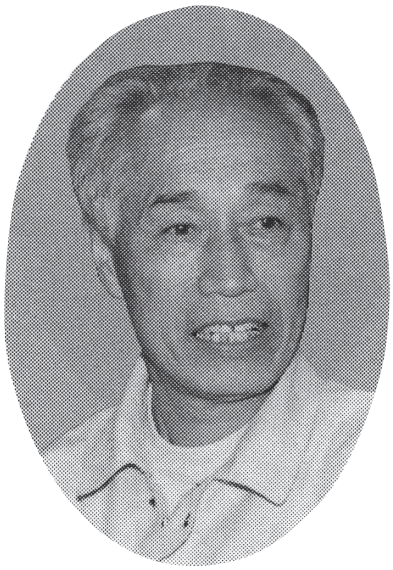
いま、2023 年。半世紀過ぎて、わたくし美術館について賛成者が増えていることを知りうれしい気持ちです。

コレクターの方も個性豊かになり、自分を表現する時代となりました。存分に個性的な美術館を立ち上げて下さい。それぞれの美術館が夢を持ち、魅力いっぱいの美術が展示されていることを想像するだけでうれしいです。

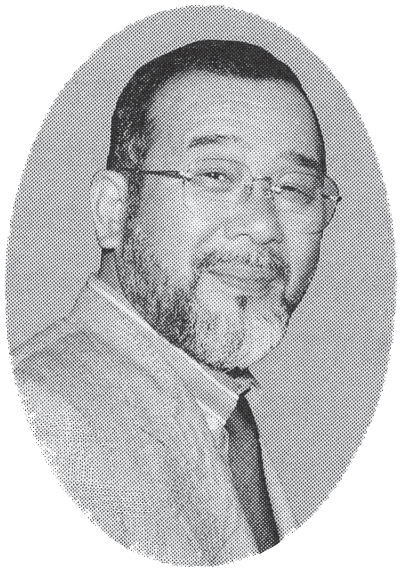
期待しています。

〈 参考 〉

尾崎正教（おざき・せいきょう／ 1922 ～ 2001 年）愛媛県大洲市生まれ。小学校の美術教師をしながら、久保貞次郎に師事、傾倒し創造美育運動、小コレクター運動を推進。1971 年「人間と大地のまつり」を代々木公園で開催（尾崎正教、ヨシダ・ヨシエ企画）。74 年現代版画センター事務局長。76 年手島重衛と千葉県に磯辺行久美術館を設立。「わたくし美術館の会」を主宰。1980 年著書『わたくし美術館』第 1 巻を刊行、その後 4 巻迄発刊、「わたくし美術館」設立ブームを作った。その後、美術館村構想、文化勲章リーグ等のムーブメントを起こしながら 2001 年旅先で突然没、79 歳。



尾崎正教さん



実川暢宏

堀 良慶様　20 年史作成、ご苦労様です。そしておめでとうございます。

あーと・わの会顧問　中尾誠男（神奈川県相模原市）

堀さん、貴殿の 20 年にわたる活動を傍で拝見させて頂いて、考えますと、「あーと・わの会」は貴殿の献身的活動なくしては、これまで続けて来られなかったであろう、と思います。

どのような会も情熱をもって取り組む人がいなければ、必ず、利害が衝突して、消えてゆくものだという意見を言う人がいます。一面の真実を言っていると思います。又、「俺が俺が」と自分が「長」になる人間だと、必ず反発する人がいます。

女房役に徹して、献身的に情熱をもって、やってこられた堀さんの姿勢が、これだけの集団が「構成員一人一人は、皆様お山の大将です」。20 年たいしたトラブルもなく、当初の目的を達成する集団として、続けて来られたのは、歴代の理事長様の働きや、その時々で、貢献された方々の力である事は論を待たないことではありますが、貴殿の変わらぬ女房役としての情熱がなければ為し得なかった事だと思います。くれぐれも健康に留意され、その情熱を絶やさないようにしてください。

今私はディレクトフォース「上場企業、役員経験者の会」で 100 歳総研というものを立ち上げています。人生 100 年時代「平均寿命 84 歳という日本にあって」100 歳まで活躍するにはどのようにしたらよいか、という研究会です。

リンダ・グラットンというロンドン・ビジネス・スクールの教授（67 歳の女性）によれば、1 健康である事、2 生き甲斐がある事、3 経済的基盤がある事、がその条件だそうです。貴殿は 1 健康である事、2 あーと・わの会という生き甲斐がある事、3 経済的基盤がある事、いずれも合致しています。100 歳まで活躍してください。

尚、貴殿の活動の陰で、“奥様の理解と協力が不可欠であった事”を改めて申し上げます。DMAT に行っている医師の倅によれば、コロナ禍で亡くなった方の半数がシニアの独居老人だそうです。個人主義がもてはやされてきた、これまでの日本社会で、コロナ禍で見直された事の一つが絆の重要性です。あーと・わの会も絆の一つですが、クラスターを避けるためにも、中々集まる事が出来ませんでした。

最も重要な絆が家庭です。また夫婦、親子協力している家庭は、コロナにも強いという事のようです。

ドイツの元首相メルケルがドイツ国民に対し、コロナ禍で、「1 命、2 経済、に次いで 3 文化を守ります」といった言葉が世界で評価されていますが、ロシアのウクライナ進攻でも、文化を守る力が、ウクライナの国民に力を与えています。84 歳の有名ウクライナ女優や、声楽家、ゼレンスキー大統領そのものが役者出身です。絵画を守る“あーと・わの会活動”も社会貢献の一つと考えて良いと思います。100 歳現役の「2 の生き甲斐」に、自分の趣味でだけでなく、社会貢献が加味されていると、もっと強く生き甲斐を感じるのだそうです。重ねて 20 周年おめでとうございます。